

42151

教科書文庫

4
810
42-1918
2000 81505

Kodak Gray Scale

C
Y
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

2 1 20 6 8 7 9 5 4 3 2 1 10 6 8 7 9 5 4 3 2 1 0

4b
810
大7

女子國文 卷五

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

資料室

4b
810
大7

校學女等高 濟定檢省部文 年日七正 書用科教科語國 大七 月二

皇天治明



文學博士芳賀矢一編

女子國文

東京 富山房發兌



資料室

4b
810
大7
正月

教育部省檢定濟 高等女子學校 國語教科用書 第七年 正月

明治天皇



文學博士芳賀矢一編

女子國文

東京 富山房發兌





明治天皇

女子國文卷五

目次

- 一 明治天皇と世界の新聞……………一
- 二 明治天皇の御製……………六
- 三 踐祚と即位(自修文)……………一六
- 四 峠の茶屋……………二
- 五 吉野と嵐山……………三
- 六 明倫歌集より(韻文)……………六
- 七 我が父母……………九

目次

八 女子服飾の變遷……………四六

九 女子の遊戯(自修文)……………五〇

一〇 春夏の歌(韻文)……………五二

一一 吾が輩は猫である……………五五

一二 新茶を贈る。右の返事(書翰文)……………六〇

一三 マヂソン夫人……………六一

一四 勤儉……………六六

一五 國民としての女子……………七二

一六 醫者の來るまで(自修文)……………七四

一七 筑紫の旅……………八〇

一八 漆器……………八八

一九 原總右衛門の母……………九〇

二〇 ピラミッドとスフィンクス……………九六

二一 夏の草花……………一〇一

二二 植物と氣象との關係……………一〇六

二三 花むすびとべとつし(自修文)……………一一五

二四 愛すべき夏……………一二〇

二五 椰子の實(韻文)……………一二三

二六 十訓抄と著聞集……………一二五

二七 馬琴の立志……………一三三

二八 平等院……………一三

二九 借用品を傷ひし詫状(書簡文)……………一四

三〇 春の七草と秋の七草(自修文)……………一四

三一 妻の卓見……………一七

三二 秋夜……………一七

三三 交際と文學の趣味……………一五

目次終

女子國文卷五

一 明治天皇と世界の新聞

萬口一致
盛徳大業

明治天皇の崩御あらせらるゝや、世界各國の新聞紙は萬口一致哀悼の辭を掲げ、其の盛徳大業を稱へ奉れり。左に掲ぐるは崩御當時發行のロンドン・タイムス及びモーニング・ポストの一節なり。

陛下の御治下に、日本は幾百年間窳^{きん}束^{そく}せられつゝありたる桎^し梏^こを打破し、進んで世界列強國の間に堂々たる武備を

牢乎として
抜くべから
ず

脚下に拜跪
せしむ

光彩陸離

整へ、牢乎として抜くべからざる地歩を占有したり。陛下は
其の發端より此の大業に參與し給ひ、これを正路に指導す
るの任に膺あたらせられ、かくして遂に東洋史上磨滅すべから
ざる御自身の記録を留めさせ給へり。陛下の御治世中、日本
は啻に驚くべき國內の大維新を遂行したるのみならず、更
に舊邦支那をして其の脚下に拜跪せしめ、かつ一時は歐洲
列強中の最も彪大にして、かつ最も尊大なる一國をも征壓
したりき。日本は將來に於て如何に發展すとも、日本が先帝
御治下に於て成功したる如き光彩陸離たる幾多の偉業を、
陛下の爲させ給へる如き短期間を以て成就せん事は、到底
望む可からざる所たり。かゝる渾身みづかみの御努力と剛毅なる御

傀儡

居常忪々

意志とを以て、克く其の臣民を鼓舞激勵し得給ひたる君主
は、決して一箇無爲の傀儡くわいらいにあらざりき。しかも、戦勝の諸將
帥が、常に其の勝利を以て君主の御稜威に歸するを例とす
るに拘らず、世上の稱揚に對して、未だ曾て何等名譽の分配
に與らんと欲し給はざりき。凡そ偉大なる元首にして、未だ
陛下の如く恭謙遜讓の美德を守らんとして、居常忪々たる
御方はあらざりき。其の臣下は忠實に陛下に奉侍し、而して
陛下も亦能く之を認知し給ひたり。其の一たび他を信任し
給ふや、永久に渝らせ給ふこと無かりき。惟ふに先帝陛下の
成功の御秘訣は、近く奉侍したる忠實にして賢明なる一團
の人士を全然御信賴あらせられ、敢へて猥りに彼等の爲す

好箇の模範

所に干涉し給はざりし一事に存したるならん。東洋に於ける最初の立憲國の君主は、又克くあらゆる立憲國君主の爲に好箇の模範たるを得べし。(タインムス)

顯赫

日本の第二百二十一代なる天皇陛下の崩御は、近代世界に於ける最も偉大なる帝王の御一方を拉し去りたり。而して日本は古來其の皇位を輝かしたる最も顯赫なる元首中の一つを失へり。有史以來、幾多の帝王は生れて其の邦土を統治し、而して一切の生物と等しく次第に凋落し了れり。然れども歴史ありてより以來、何れの帝者も未だ曾て斯の如く普遍にして深厚なる悲嘆の中に、且斯の如く稀有なる愛國心と信仰心との光景の中に、其の玉笏を遺して登遐せし者

玉笏を遺して登遐す

僻陬

内帑

限局

あるを見ずと斷言するも可なり。

國內何れの場所にも、假令僻陬の地と雖も、災厄の生ずる毎に、必ず陛下の内帑は衆に先んじて罹災民救濟の爲に開かれたり。皇室の仁慈は曾て限局する所なく、はた毫も階級の區別を認めさせられざりき。これを往時と比較せば、先帝御統治の下なる日本は、暗黒に對する白晝の光明なり。嗚呼、實に先帝は御身を以て其の最も優麗なる詩篇(陛下には多數の御製あり)の一つに詠出し給ひたる其の精神を實現し給へり。

照るにつけ曇るにつけて思ふかな

我が民草の上はいかにと (モリスト)

二 明治天皇の御製

さし昇る朝日の如くさわやかに

もたまほしきは心なりけり

敷島のやまと島根の教草

神代の種ののこるなりけり

四方の海皆はらからと思ふ世に

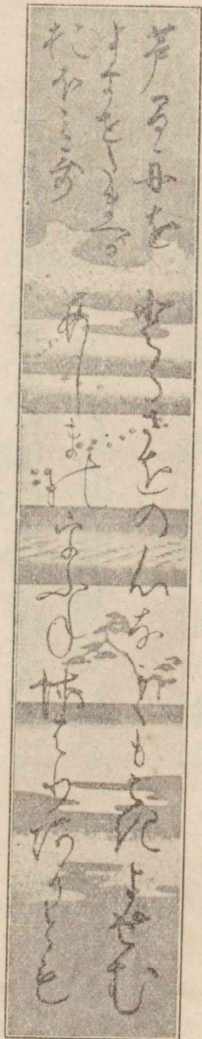
など浪風のたちさわぐらん

白露のおきふし毎に思ふ哉

民の草葉のさかゆかん代を

おのがじし務を終へし後にこそ

花の蔭には立つべかりけれ



明治天皇御製
昭憲皇太后御筆

樞原のとほつ御祖の宮ばしら

建てそめしより國は動かず

おのが身を修むる道は學ばなん

華間舟を
よませた
まへるお
ほみ歌の
とるさくも
心ながくも
こぎよせん
あしまのを
ぶねさはり
ありとも

なりはひ

賤がなりはひ暇なくとも

軍人いかなる野邊にあかすらん

蚊の聲しげくなれる此の夜を

子らはみな軍のにはに出ではてよ

翁やひとり山田もるらん

おもほえず夜を更しけり國の爲

たふれし人の物がたりして

世とともに語り傳へよ國の爲

命をすてし人のいさをは

時はかる器の針のともすれば

狂ひがちなる人の世の中

たらちねの親の心を慰めよ

國につとむる暇ある日は

獨立つ身となりし子を幼しと

おもふや親の心なるらん

玉川の清き流にやどりても

なほおぼろなる春の夜の月

荒磯の松の本蔭にしほ風を

よきても咲ける山櫻かな
たらちねのみ親の御代の舊事を
思ひぞ出づる庭のたちばな
涼しくも月の光になりにけり
波の洗ひし濱のまさご路
行く水は照る日にかれていさゝ川
風になみよる薄がるかや
長くなりまどかになりて蓮葉に
まろぶも涼し露の白たま

わたの原追風をうけて行く船の
片帆にかゝるゆふだちの雨
政いでて聴く間はかくばかり
暑き日なりと思はざりしに
寄りそはん閑はなくとも文机の
上には塵をすゑずもあらなん
足引の山の端いつる月影に
大海原の波を見るかな
おく露の光になりて更けにけり

かばかり多数の御作のあつたことは、平素何等の娛樂をも
 近づけ給はず、酷暑嚴寒の時も、一度として遊幸の仰出なく、
 常に宮中におはして、唯一の御慰となされたのが即ち和歌
 であつたからである。之を思へば、實に恐多いことで、且又其
 の神々しい御性格を窺ひ奉ることが出来る。御製を拜誦し
 奉るものは、一言一句、これが即ち萬機親裁の餘、御くつろぎ
 遊ばされた御日常の御慰安であつたといふことを拜察し
 なければならぬ。

日常の御慰安の爲にお詠み遊ばされた數々の御詠、其の
 風調は高く、規模は大きく、如何にも萬世一系の帝祚を踐ま
 せたまふ上御一人の御作とうかゞはれる。國をおもひ、民を

風調

(1) Roosevelt.

動機

經典

森嚴雄大

典範

あはれませ給ふ大御心は、常に御製の上にあらはれて居る。
 一首の歌が、米國大統領ルーズヴェルト氏を動かして、講和
 仲裁に盡力させる動機となつたといふ御逸話のごときは、
 三十一文字の和歌が、千萬の兵馬にもすぐれたる力を示し
 たもので、和歌始つて以來、未曾有のことである。まして七千
 萬の國民が日常拜誦して、自然に蒙る偉大な感化に於ては、
 何等の經典も之に並ぶものは無い。日々の御慰が直ちに國
 民教化の源泉となる、これ程の貴さが、何時の世、何所の國に
 あらうか。

明治時代の詔勅は森嚴雄大ながく國史を照して、後世の
 國民に聖代を語り、典範を示すのである。併し詔勅にはそれ

玉の御聲
草莽の微臣

どれの形式があり、聖意を承けて起草する人のあることも明白である。御製は直ちに大御心の發したもので、之を拜誦するものは、即ち直接に玉の御聲を拜聽するのである。草莽の微臣まで日々玉の御聲を拜聽するの光榮を有するのは、實に我が國民の特殊な幸福である。

自修文

三 踐祚と即位

萩野 由之

先帝崩御ましまして後、皇太子其の後を承けて皇位に即かせ給ふことは、古今の常典じょうてんである。此の位に即かせ給ふことを踐祚せんそとも、即位ともいふ。古語には「天つ日嗣つひ知ろしめす」といふ。祚は皇位の事で、踐はフムともノボルとも

常典
式定まつた儀

御内儀の御事
宮中うちく
の御事でおも
てむきてない
意

公式
おもてむきの
儀式

解して、踐祚即ち皇位に登るといふ意となるので、即位と同じ意味である。

然るに平安時代から、同じ意味の踐祚と即位を區別して、二様に使用する事となつた。即ち

踐祚は先帝の崩後に新帝の神器を受けさせたまふ事をいふ……………

これは御内儀の御事。

即位は踐祚の後に時経て御即位の式を行はせらるゝ事をいふ……………

これは公式の御事。

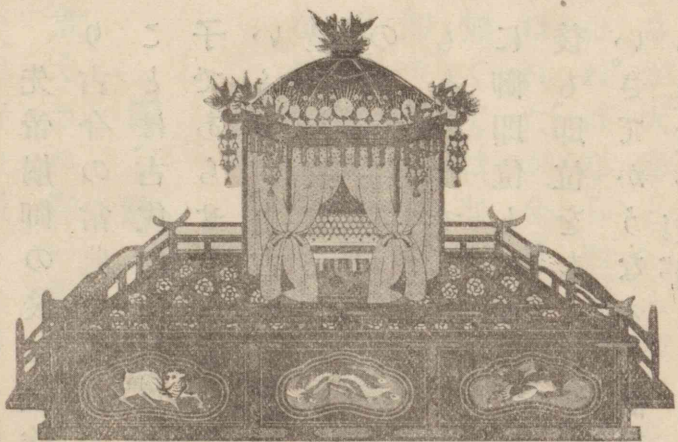
いづれにしても御即位には相違ないが、公式を行はせられると行はせられぬだけの別である。事實は、踐祚と同時に天皇であらせられるのである。

渡御
お渡りと同じ
方へおつり
に方おつり
神事なること
神事先帝にお
つり新帝にお
れること。

(一)京都御所の
一殿。紫宸殿
の西北。

踐祚の式、これは大體むかしも今もたいした相違はない。新帝踐祚のときは祖宗の神器を受けさせられる。これを此の度—今上陛下御踐祚の御時—神器渡御と申してある。

昔は三種の神器の中の鏡と劔の二種を御受けになる事であつた。玉(神璽)も附隨した。神武天皇の御即位には其の通りであつた。然るに後には神鏡は賢所に祀り奉つて、清凉殿の御座所には劔璽の二種だけであるから、賢所の神鏡を御動かし申すのを憚らせられてか、遂に劔と璽の二つを授受する御式となつた。これは多分平安時代からの事で、朱雀天皇の時には既に劔璽の二つで、此の頃から永く此の通りであつて、今度の御式の神器渡御の趣も、さやうに拜察せらるゝのである。



高御座

神器をお受けになれば、天皇の御位に即かせられたのであるから、天皇と申し上げるのは當然の事であるが、昔は色々妙な事もあつた。踐祚なされても即位式を正式に行はせられぬ間は、天皇と申されぬ時もある。また先帝崩御あらせられて皇太子が政を聽き給ひながら、踐祚もなされず、天皇とも申されずに、やはり皇太子のまゝであつて、六年の後に即位の禮を行はれたこともあつた。これは

空闕
と。かけて無

天智天皇の場合で、非常の變則といはねばならぬ。先帝崩御の後に踐祚行はせられるのは、前にも申す通り古今の常典であるが、但し崩御と同時に、踐祚なされることは、古代にはまづ無い。大體崩御の年は、其のまゝ皇太子であらせられて、翌年になつて、即ち年を踰えて即位といふのが、上古の恒例である。古くは懿德天皇でも、崇神天皇でも、敏達天皇でも、皆其の通りである。これは先帝崩御の悲みに堪へ給はずして、即位を急ぎ給はぬといふ至情もあつたであらう、又御大葬、其の後の喪期をすませて後に御即位となるのであらうが、又中には御大葬がすんで後、即位をなされずに、延引してゐたことも無いでは無い。さてかうなると、御崩御と御即位との間の年月は、天皇の皇位が空闕してゐるといふ不都合がある。尤も皇太子

(二)第十條。

であつて、政事を御裁可遊ばされる以上は、事實天皇であるが、天皇といふ御名を申されぬから、其の間は空位といはねばならぬ。萬事簡單にすんだ世の中には、それでも行はれたが、今日のやうな複雑な世の中には、一日も天皇が無くてはならぬ。そこで皇室典範に、天皇崩スル時ハ皇嗣即チ踐祚シ祖宗ノ神器ヲ承クとある。此の條文によつて、先帝崩御と同時に踐祚遊ばされて、天皇と申される事になつたのである。

—讀史の趣味—

四 峠の茶屋

夏目漱石

煮えきれない雲

煮えきれない雲が頭の上へもたれかゝつて居たと思つたが、何時の間にか崩れ出して、四方は只雲の海かと怪しま

山の峽

霧を欺く

山の裾
ちよくく

れる中から、しとく、春の雨が降出した。山の峽を行くのだ
が、雨の絲が濃かで、霧を欺く位だから、隔りはどれ程か分ら
ぬ。時々風が来て、高い雲を吹拂ふとき、薄黒い山の脊が右手
に見えることがある。何でも谷一つ隔て、向ふが脈の走つ
て居る所らしい。左はすぐ山の裾と見える。深くこめた雨の
奥から、松らしいものがちよくく、顔を出す。出すかと思ふ
と、隠れる。雨が動くのか、木が動くのか、夢が動くのか、何とな
く不思議な心持だ。

路は存外廣くなつて、かつ平だから、歩くに骨は折れぬが、
雨具の用意が無いので急ぐ。帽子から雨垂がぼたりくと
落ちる頃、五六間さきから鈴の音がして、黒い中から馬子が

ふうと

ふうと現れた。

「こゝらに休む所は無いかね。」

「もう十五町行くと、茶屋がありますよ。大分濡れたね。」

「まだ十五町かと振向いて居るうちに、馬子の姿は影畫の
やうに、雨につままれて、又ふうと消えた。」

糠カのやうに見えた粒は、次第に太くなつて、今は一筋ごと
に風にまかれる様までが目に入る。羽織はとくに濡盡して、
肌着に浸込んだ水が、からだの溫りで、生ぬるく感ぜられる。
氣持が悪いから、帽を傾けて、すたく、歩く。

「茫々たる薄墨色の世界を、幾條の銀箭が斜に走る中を、ひ
たぶるに濡れて行く我を、我ならぬ人の姿と思へば、詩にも

銀箭
ひたぶるに

有體客觀

詩中の人
畫裡の人
豎子
雲烟飛動

満目

なる、句にもなる。有體な己を忘れ盡して、純客觀に眼をつけるとき、始めて我は畫中の人物として、自然の景物と美しき調和を保つ。只降る雨の心苦しうして、踏む足の疲れたのを氣に掛ける瞬間に、我は既に詩中の人にもあらず、畫裡の人にもあらず、依然として市井の一豎子に過ぎぬ。雲烟飛動の姿も眼に入らぬ。落花啼鳥の情も心に浮ばぬ。初は帽を傾けて歩いた。後には只足の甲のみを見詰めて歩いた。終りには眉をすばめて、恐るゝ歩いた。雨は満目の樹梢を揺がして、四方より孤客に迫る。

「おい。」と聲を掛けたが返事がない。

屈託氣にふ
らりく

床几

軒下から奥を覗くと、煤けた障子がたて切つてある。向側は見えない。五六足の草鞋が、寂しさうに庇から吊されて、屈託氣にふらりくゝと揺れる下に、駄菓子箱が三つばかり並んで、そばに五厘錢と文久錢が散らばつてゐる。

「おい。」と又聲をかける。土間の隅に片寄せてある白の上にくくれて居た鶏が、驚いて眼をさます。ククク、クククと騒ぎ出す。敷居の外に土竈が今しがたの雨に濡れて、半分程色が變つてゐる上に、眞黒な茶釜が掛けてあるが、土の茶釜か銀の茶釜か分らない。幸ひ下は焚きつけてある。

返事がないから、無斷でずつとはいつて、床几に腰を卸した。鶏は羽ばたきをして白から飛びおりる。今度は疊の上へ

閑靜に控へ

あがつた。障子がしめてなければ、奥まで駆けぬける氣かも知れない。雄が太い聲でコケッココといふと、雌が細い聲でケケココといふ。床几の上には一升枡程な煙草盆が閑靜に控へて、中には渦を卷いた線香が、日の移るを知らぬ顔で、頗る悠長に燻つて居る。

雨は次第に収る。

しばらくすると、奥の方から足音がして、煤けた障子がすらりと開く。中から一人の婆さんが出る。

どうせ誰か出るだらうとは思つて居た。竈に火が燃えて居る。菓子箱の上に錢が散らばつて居る。線香がのんきに燻つて居る。どうせ出るにはきまつて居る。しかし自分の店を

すらりと

明放して苦にならないと見える所が、少し都とは違つて居る。其の上出て來た婆さんの顔が氣に入つた。

二三年前、寶生の舞臺で「高砂」を見た事がある。其の時これは美しい活人畫だとおもつた。箒を擔いだ爺さんが、橋懸を五六歩來て、そろりと後向になつて、婆さんと向ひ合ふ。其の向ひ合うた姿勢が、今でも眼につく。こちらを向いた婆さんの顔にも記憶がある。茶店の婆さんの顔は之によく似て居る。

「お婆さん、此所をちよつと借りたよ。」

「はい、これは一向存じませんで。」

「大分降つたね。」

「生憎な御天氣で、嘸御困りで御座んしよ。おゝ、大分御

焦茶色

無雜作

濡れなさつた。今火を焚いて乾かして上げましよ。」

「そこをもう少し燃しつけてくれよば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた。」

「へえ、只今焚いて上げます。まあ御茶を一つ。」

と立上りながら、しつくと、二聲で鶏をおひ下す。ココココと驅出した夫婦の鶏は、焦茶色の疊から、駄菓子箱の中を踏みつけて往來へ飛出す。

「まあ一つ。」と婆さんはいつの間にか、くり抜の盆の上に茶碗をのせて出す。茶の色の黒く焦げて居る底に、一筆がきの梅の花が三輪、無雜作に焼附けられて居る。

「御菓子を。」と今度は鶏の蹈みつけた胡麻ねぢと、微塵棒を

持つて來た。

そして婆さんは、袖無の上から襷をかけて、竈の前に蹲る。余は懷から寫生帖を出して、婆さんの横顔を寫しながら、話をしかける。

「閑靜でいよね。」

「へえ、御見かけ通りの山里で。」

「鶯は鳴くかね。」

「え、毎日のやうに鳴きます。此の邊は夏も鳴きます。」

「聞きたいな。ちつとも聞えないとなほ聞きたい。」

「生憎今日は先刻の雨で何處かへ逃げました。」

折から、竈のうちがぱちくと鳴つて、赤い火が颯と風を

颯と

板庇

起して、一尺あまり吹出す。

「さあ、御あたり、さぞ御寒かる。」といふ。

軒端を見ると、青い烟が突當つて崩れながらに、微かな痕をまた板庇にからんで居る。

「あゝ、好い心持だ、御蔭で生返つた。」

「いゝ具合に雨も霽れました。そら天狗山が見え出しました。」

逡巡

一角

逡巡として曇りがちな春の空を、もどかしとばかりに吹拂ふ山嵐の、思ひ切りよく通り抜けて、前山の一角は未練もなく晴盡して、老婆の指さす方に噴^{ふん}呪^{ぐわん}と、あら削りの柱の如く聳えてゐるのが天狗岩ださうだ。

半々に

翳す

春の山路の
景物

途端

余はまづ天狗岩を眺めて、次に婆さんを眺めて、三度目には半々に両方を見比べた。そして余は天狗岩よりは、腰をのして手を翳して、遠く向ふを指さしてゐる袖無姿の婆さんを、春の山路の景物として恰好なものだと思つた。余が寫生帖を取上げて、今しばらくと思ふ途端に、婆さんの姿勢は崩れた。

手持無沙汰に寫生帖を火にあてゝ乾かしながら、

「御婆さん、丈夫さうだね。」と尋ねた。

「はい、有難いことに達者で、針も持ちます、芋もうみます、御團子の粉もひきます。」

——草 枕——

五 吉野と嵐山

藤岡作太郎

香雲はるか
にたなびく

(一)大和國吉野
郡に屬す。早
く萬葉集に歌
あり。

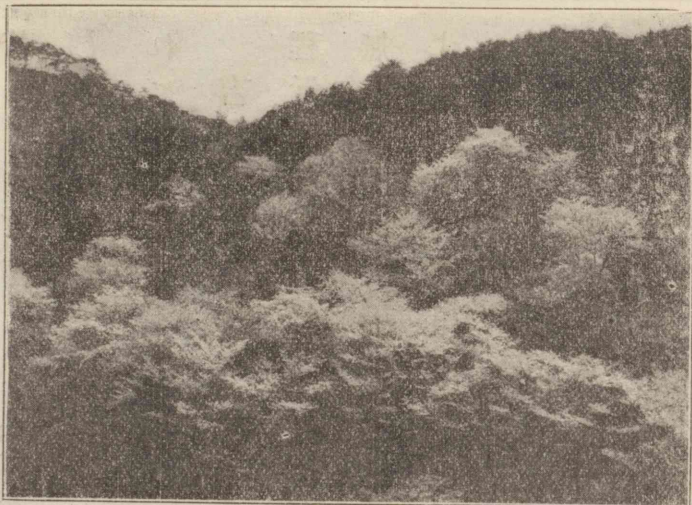
吉野は奈良時代以前より歌にもよまれて、名高き所なるが、初は吉野川の清き流を賞して、水邊に離宮をも設けられしなり。香雲はるかにたなびきて、日本一の花の名所といはれしは、平安時代此の方なるべし。
吉野川を渡れば六田の里あり。此より坂になりて吉野山に入る。奥の院迄二里餘の間に、櫻の多き所、下と、中と、上と三箇所ありて、稍開落の時を異にす。下の一目千本最も壯觀なり。總じて吉野は、馬の背のやうなる山の上に町ありて、そこより谷の櫻を見下すなり。花は一重の山櫻にて、赤き若葉の間に優しく瘦せて咲く。肥えて派手なる姿はなけれど、千朶

(三)これはく
とばかり花の
吉野山。一安
原貞室

(三)歌書よりも
軍書に悲し吉
野山。各務
支考

(四)天武天皇

(五)護良親王。



ひ、大塔宮の軍敗れて、村上義光父子は春の花と散りぬ。其の

萬朶、山一杯に咲満ちたるを望めば、古人の、^(二)「これはく」と驚きしも理なりと頷かる。

吉野の花盛を賞めたる詩歌は數へも盡されねど、此の山は又歴史上の舊跡として、遊人の心を動かし、^(三)歌書よりも軍書に悲し。といはれたり。大海人皇子がこゝに潜み給ひしを始として、義經主従は嶺の白雪に蹈迷

(六)山寺の春の夕暮来て見れば、入相の鐘に花ぞ散りける。(新古今集、能因法師)

(上)古渡松栢吼天驤。山寺尋春春寂寥。眉雪老僧時輟帶。落花深處說南朝。(藤井竹外)

(大)大井川上流の稱。丹波國保津村と山城國嵯峨との間に在り。

いやが上

のち吉野時代の皇居として、至尊が山里の御起臥、いかに心苦しくましく、けん^(六)山寺の春の夕暮来て見れば、春寂寥にして、老僧帚の手をやめて、落花深き處に昔語をするもあはれにこそ。

吉野の花に惜しむべきは、水の眺のなきことなり。吉野川程近く麓を走れども、花の山より川は見えず、水の邊に花は無し。隅田河畔の向島は、花と水と長く相沿ひたれど、山を見ず。花と水と共に備れるは嵐山なり。保津川^(大)の流深く山を劈きて、丹波より山城に入る。其の峽の將に開けんとする處に、此の山あり。山は覆りて淵に墜ちんとし、水は衝いて麓を穿たんとす。松の翠いやが上に茂りたる中に、花の雲、紅葉の錦

(九)第八十八代。(一〇)山城國葛野郡。大桑附近より以西嵐山稱に至るの汎



畫よりも美しく、夏の涼みにもよろしく、雪の降りたるは尙更面白く、四季の景色、いつとして佳ならざるはなし。

嵐山の櫻も吉野の種なり。平安時代にも、既に此の山地は類なき勝地として知られしが、其の頃はなほ秋の紅葉ばかりを賞したりしに、後嵯峨天皇の嵯峨^(一〇)に

(二)靈龜山と號す。嵐山城國葛野郡峨村大葛の字。龍寺に在り。京都五山。

離宮を設け給ふに及びて、そこより眺めんがために、吉野の櫻を對岸の嵐山に移し植ゑさせ給ひしなり。其の離宮は後に禪寺に變りぬ。天龍寺これなり。——新體國語讀本——

六 明倫歌集より

後醍醐天皇

世をさまり民安かれと祈るこそ

わが身につつきぬ思なりけれ

源實朝

山はさけ海はあせなん世なりとも

君にふた心われあらめやも

山上 憶良

(一)歌人。天平五年(三九三)砂。年七十四。

白がねもこがねも玉も何せん

まされる寶子にしかめやも

藤原兼輔

(二)歌人。承平三年(一一九三)歿。年五十七。

人の親の心は闇にあらねども

子を思ふ道に迷ひぬるかな

菊池武時

(三)南朝の忠臣。肥後の人。元弘三年(一一九三)戦死。年四十二。

ふる郷に今宵ばかりの命とも

知らでや人の我をまつらん

九條道房

(四)東山天皇に仕へて左大臣攝政となる。

咲く花の梢を見ても思ひ出づる

(五)白川樂翁のこと。本書卷三の三一頁参照。

(六)歌人。正暦元年(二六五〇)歿。

(七)國學者。文化八年(二四七六)歿。年六十七。

つらなる枝の枯れし名残を

松平定信(五)

埋火のあたりのどかにはらからの

まどゐせし世ぞ戀しかりける

藤原兼輔

あたらしき年の始のうれしきは

人のふるき人どちあへるなりけり

平兼盛(六)

世の中に嬉しきものは思ふどち

花見てくらす心なりけり

村田春海(七)

天地の神やかためし萬代に

七 我が父母

新井白石

われ物の心をわきまへしより此のかたの事は覚えしに、父が日々の事唯同じさまにして、露たがふ所おはせざりけり。寅の時ばかりには必ず起出で給ひて、水をもて身を洗ひすゝぎて、自ら髪取上げ給ひき。夜寒き頃は、母にておはせし人の、我も齡のかたぶきぬれば、夜寒に堪へず。とて、圍爐裏に火をうづみて、それに足さしふし給ひて、鑪子に湯を入れて、火の邊にさし置いて、父の起出で給ふ時に、其の湯を參らせ

鑪子

下部

幼き子も啼
をといむ

られたりき。二人ともに佛の道をたふとみ給ひしが、父にておはせし人の髪取上げはてゝは、衣裳あらためて佛を禮し給ふこと。曉毎に怠り給はず。父母の忌日には、手づから飯を炊きてすすめられ、下部等に命ぜられし事あらず。夜いまだ明けざる程は、坐してあしたを待ちて、夜明けはてゝ出仕したまふ。父のおはせし所は南にありて、出仕し給ふべき門は北にありしに、朝には東よりし、夕には西より道し給ふ。雪踏とて革を底にしたるものを召して、いかにも足音の高らかに聞ゆるやうに過行き給ひしかば、我が父の來り給ふは、皆人の聞知りし程に、幼き子も其の啼をとゞめたりき。

喜怒の色

たち居かろ
すがろしから

我が物覚えしよりは、髪に黒き筋は少かりき。面は方におはしまして、額上高く起り、眼大きく、鬚多く、たけは短くおはせしかど、すべて骨太く、逞しく見え給ひたりき。天性喜怒の色あらはれ見え給はず。笑ひ給ふにも、聲高く笑はせ給ひし事は覺えず。まして人を叱り給ふには、あらゝしきことを宣ひしことを聞かず。もの宣ふ事も、いかにも言葉少くして、たち居かろゝしからず。驚き給ひ、騒ぎ給ひ、事に堪へかね給ひしなどいふ事は見し事あらず。たとへば灸治などし給ふにも、灸小さきと、數少きとは無益の事なり。と仰せられて、大きな灸を其の數少からず、五所も七所も一時にすゑさせて、痛ませ給ふ氣色も見え給はず。

日を消す

身靜なる時には、常におはします所を淨く掃ひて、壁上に古畫をかけて、花瓶には春秋の花をすこしく挿みて、それに對して黙坐して日を消し給ひ、又みづから繪かき給ふことなどもありき。それも色を設けたる繪などをばこのみ給はず。身の病み給ふときより外は、人を召して使ひ給ふといふことなく、何事もみな手づからなし給ひたりき。朝夕の物をめすことも、飯は二椀を過ぎず、手して椀をさぐるに、其の輕重によりて、飯の多き少きは知れぬれば、其の餘物は、飯の多少によりて、多くも少くも食ひて、常に我が腹に滿つる分量を過すべからず。口にかなふ物なりとも、一色をのみ多く食ひぬれば、必ず其のために傷めらるゝ事あり。何物をも擇

たがひに相制す

ばずして、皆々少しづつ食ふ時は、たがひに相制する所あるにや、食のために傷めらるゝことは少しと覺ゆるなり。」と仰せられき。



白石

世の常には、こなたより參らする物をめして、何物を參らせよと宣ひし事はあらず。たゞ「四時の新味をば、其の出で來りし初に、何物に限らず參らせよ。」と仰せられて、家人と共に聞き召しけり。

歡を受く

酒は僅かも喉に下し給へば、大きに酔ひ給ひしかば、唯盃を把りて、歡を受け給ふのみなりき。茶をば好みてめしけり。

身におふ

身にめしける物も、家におはする時は、洗ひ濯ぎし物をもめしけれど、垢づきぬるをば、いね給ふ時もめすことなく、門を出で給ふに至つては、必ず新しく鮮なる物どもをめす。それも身におひ給はぬ品の物用ひられし事はあらず。むかし人は、常に身死しなん後の見苦しからぬやうを心にかけてしなり。など宣ひたりき。扇子などをも、人多き中に取りも落し、遺れもすることあり。これらの物にても、其の主の心は推量するゝことなり。と仰せられき。

我が母にておはせし人は、ものよく書き給ひしのみにあらず、歌の道をも傳へ習ひて、代々の集、又は物語の類など、我が姉妹に讀教へ給ひ、圍碁、將碁なども堪能におはして、これ

致仕
いみじく

らの事をも我に教へ給ひたりき。香爐箱のうちに、琴の爪を袋にして入れおかれしを見し事あれば、これ等の事をも好き給ひしにや。我が見まゐらせしよりは、織り縫ふ事こそ女の業なれ。と仰せられて、年毎に美しき筋の布と、いろ／＼の文ある絹をみづからも織り、人にも織らせ給ひ、それを父にもめさせ參らせ、我にも賜はりしが、今も少しは家に残り。賤しき者の言葉に、似たる者の夫婦とはなるなりといふ事のあるが、もの宣ひ、爲し行ひ給ふ事どもの、父にておはせし人にたがふ所なくてぞおはしましたりける。父の致仕し給ひし後には、これも髪おろし給ひて、佛の道をいみじく行ひ、六十三にて終り給ひき。

——折りたく柴の記——

八 女子服飾の變遷

太古より今日に至るまでの女子の服飾の變遷は、詳に之

を述べんこと容易の

平業にあらず。今簡單に

安其の大要を言はん。

代時 上代の女子は髪を

束ねて後方に垂れた

り。衣服は筒袖の上



に禪しんを穿ひつ。上衣は丈短くして膝頭の邊に達し、禪は太き筒形にてズボンの如く、まづ之を穿ちて上衣を着、其の上に帶

領布

をしめたり。こは男女とも變りなかりしが、女子は肩に領布をかけ、腰には裳を纏へり。衽は皆左衽なりき。材料には荒妙とて麻、葛、楮等より作れると、和妙とて絹より作れるとあり。

三韓、隋、唐の文明

徳を傳へし後は、材料

川も華美に赴き、錦、綾

紗の如き物を用ひ、

刺繡も進歩し、女子

は太く長き筒袖の



上に唐衣からぎを着、衽は右衽に改れり。平安朝に入りて、貴女の服装は所謂十二單じふにだんとなれり。十二單とは內衣、緋袴、單、五衣、紅の

打衣、表着、唐衣、裳を取重ねたるをいふ。五衣は五つに限らず、幾領にても重ねたり。之を正装の服とす。平服には唐衣、裳を着けず、表衣の上に小袿を着たるのみ。之を小袿姿ともいへり。百人一首の繪を見れば、此の二種の區別を認むべし。

宮女の服装は近代に至るまで大變化なかりしが、武家の女流の服装には、小袿を用ふる事やみて、小袖を着、其の上のうちかけ又ははいどりを着る事となれり。庶民は男も女も袴を着くること次第に廢れぬ。

徳川三百年の昇平こそ、女子服装の上にも様々の變遷をあらはしつれ。其の初世には、衣服も裾長からず、袖も短くして七八寸に止り、華美なるものは山水花鳥の大模様を摺箔

昇平

摺箔

にて現せしが、後には金絲を以て縫へり。元祿の華美なる時代を経て、袖の長さ次第に延び、後には一尺五六寸にもなりて、振袖といひて喜べり。帯も初は二三寸幅なりしが、後には八九寸に及び、金襴、緞子、綸子、琥珀、天鷲絨等、外國輸入品をも多く用ふるに至れり。帯の結方にも様々ありて、時々の流行を成せり。女子の髪を結ふことも徳川時代に始りて、時々の流行變遷は、一々枚舉に遑あらず。今日最もひろく行はるゝ丸髻、島田、银杏返、唐人髻の如き、皆幕政時代の遺風なり。笄、簪の如き皆之につれて、變遷あり、種類あり。

明治維新の後、男子は、頭の髻を切り、洋帽をかぶり洋服を着ること日一日と多くなりしが、女子の風俗は尙舊きを守

袴袴

とや言ふべき

りて、年々の趣味にこそ流行の差はあれ、髪形も、服装も、なほ昔時の面影を留む。女子の洋装は今なほ男子の洋装の如く多く行はれず。女子が参内の禮服として袴袴を用ふること、大正の即位大禮より盛に行はれて、反りて復古の觀を呈せり。唯最近二十年來束髮の流行甚だしく、都鄙を風靡するに至りしは、繁劇にして簡便を尙ぶ社會生活の影響とや言ふべき。されど其の上に西洋流のハット、ボンネットを用ふること絶えて無し。

自修文

九 女子の遊戯

おにごつこ、かくれんぼなどは、男の子にも、女の子にも

共通な遊である。開いた開いた、子を取る子を取るなどは、むしろ女の子の遊であらう。遊道具を持つての遊戯は、男の子には紙鳶、獨樂が普通で、女の子には羽根つき、お手玉、鞠などが、古くから今までも行はれて居る遊戯である。人形遊やまゝ事も、將來育兒家政の大任に當る事を考へて見ると、女の子には最もふさはしい遊戯である。その最も整備したのが雛祭である。

ふるい時代には繪合、草花合などといつて、さまざまの合せ物の遊があつたが、これは其の品物に工夫を凝し、それに歌を添へて出したので、主として高貴の人の間に行はれ、子供の遊では無かつた。雙六や碁も上流婦人の間には行はれたが、雙六は今の雙六とは違ふ。今の雙六は東海道五十三次の道中雙六が始で、段々進んで上りまで行く

舉止
たちか、ふる
まひ。

といふ遊である。今から二百年程前に出来たのが本である。カルタも徳川時代になつてから出来たので、今行はれてゐるのには、いろはガルトや、百人一首のカルタがある。女子の遊に戸内遊戯が多かつたのも當然であるが、今は學校へ行かぬ子も無いし、學校でさまざまの戸外遊戯を教へぬ所もない。女子は舉止態度のしとやかに、おとなしいのが大切であるが、戸外の運動を盛にして、身體を強健にすることも必要である。手鞠をつくばかりでなく、バスケツト・ボールや、キャビテン・ボールや、メヂシン・ボール、セリター・ボールなども面白い。西洋の婦人間には庭球が最も盛に行はれてゐるが、これは日本にもだん／＼流行つて來た。野球は男子的で、女子的では無い。

一〇 春夏の歌

(一) 業平の孫、醍醐、村上天皇頃の人。

(一) 在原元方

霞たつ春の山邊は遠けれど

吹來る風は花の香ぞする

讀人不知

櫻狩雨はふり來ぬ同じくは

濡るとも花の蔭に隠れん

(二) 源雅兼

風ふけば波のあや織る池水に

絲ひきそふる岸のあをやぎ

(三) 紀貫之

(二) 康治二年(一八〇三)歿。年六十五。

(三) 古今集の撰者。本書卷二の九四頁を見よ。

(四)太政大臣。後
京極と稱す。
建永元年(一
八六六)年一
年三十八、歿。

(五)堀川、鳥羽、
崇徳の三朝に
仕ふ。

(六)從一位太政
大臣。寛元二
年(一九〇四)
歿。年七十四。

夏の夜のふすかとすれば郭公

なく一聲にあくるしののめ

藤原良經

うちしめり菖蒲ぞかをる時鳥

鳴くやさつきの雨の夕ぐれ

源俊頼

風ふけば蓮の浮葉に玉越えて

涼しくなりぬ日ぐらしの聲

藤原公經

露すがる庭の玉笹うちなびき

一むらすぎぬゆふだちの雲

一一 吾が輩は猫である。

夏目漱石

作戦計畫

吾が輩は猫である。吾が輩は今夜こそ鼠を捕つてやらうと思つて、種々作戦計畫を運して居たが夜はまだ浅い、鼠はなか／＼出さうにもない。大戦の前だから一休養を要する。勝手には引窓がない。座敷なら欄間といふやうな處が、幅一尺程切抜かれて、夏冬吹通しに引窓の代理を勤めて居る。惜氣もなく散る彼岸櫻を誘うて、さつと吹込む風に驚いて目をさますと、朧月さへいつの間にかさしてか、竈の影は斜に揚板のうへにかゝる。寝過しはせぬかと、二三度耳を振つて、

家内の様子を窺ふと、しんとして、昨夜のごとく、柱時計の音のみ聞える。もう鼠の出る時分だ。どこから出るだらう。戸棚の中でごとくと音がしだす。小皿の縁を足で抑へて、中をあらして居るらしい。こゝから出るわいと、穴の横にすくんで待つて居る。なか／＼出て来る氣色はない。皿の音はやがて止んだが、今度は井か何かにかゝつたらしい、重い音が時々ごとくとする。而も戸を隔てゝすぐ向側でやつて居る。吾が輩の鼻づらと直径にしたら三寸も離れて居らぬ。時々はちよろ／＼と穴の口まで足音が近寄るが、又遠のいて顔を出さぬ。戸一枚向ふに現在敵が暴行を逞しくしてゐるのに、吾が輩はぢつと穴の出口で待つて居らねばなら

旅順
腕
おさん



夏目漱石

ぬ。随分氣の長い話だ。鼠は旅順腕の中で、盛に舞踏會を催して居るらしい。せめて吾が輩のはいれるだけ、おさんが此の戸を開けて置けばよいのに。今度はへつつひの陰で、吾が輩の鮑貝がことりと鳴つた。敵は此の方面へも來たなと、そうつと忍足で近寄ると、手桶の間から尻尾がちらと見えたり、流しの下へ隠れてしまつた。しばらくすると、風呂場で、うがひ茶碗が金盥にかちりと當つた。今度は後方だと振向く途端に、五寸近くある大きな奴が、

一 吾が輩は猫である

五七

先天的

ひらりと齒磨の袋を落して、縁の下へ駈込んだ。逃すものかと續いて飛びおりたが、もう影も姿も見えぬ。鼠を捕るのは思つたよりむづかしいものである。吾が輩は先天的に鼠を捕る能力がないのか知らぬ。

頑張る

吾が輩が風呂場へ廻ると、敵は戸棚から駈けだし、戸棚を警戒すると、流しから飛びあがり、臺所の真中に頑張つて居ると、三方面とも少々づつ騒ぎ立てる。小癩といはうか、卑怯といはうか、到底彼等は君子の敵でない。吾が輩は、十五六回は、あちらこちらと氣を疲らし、心を勞らして、奔走努力して見たが、遂に一度も成功しない。残念ではあるが、かゝる小人を敵にしては、如何なる東郷大將も施すべき策がない。初は

小癩

勇氣もあり、敵愾心もあり、悲壯といふ崇高な美感さへあつたが、遂には面倒と、馬鹿げて居ると、眠いのと、疲れたのことで、臺所の真中にすわつたなり、動かないことになつた。しかし、動かないでも、八方睨みをやつて居れば、敵は小人だから、大した事は出来ないのである。目ざす敵と思つたものが、存外つまらないと、戦争が名譽だといふ感じが消えて、にくいといふ念だけ残る。にくいといふ念を通り越すと、張合が抜けてぼうつとする。ぼうつとした跡は、勝手にせよ、どうせ氣の利いた事は出来ないのだからと、輕蔑の極、眠たくなる。吾が輩は以上の徑路をたどつて、遂に眠たくなつた。吾が輩は眠つた。休養は敵前に在つても必要である。

——吾輩は猫である——

(一) 東京市郊外
内 瀧野川町の

一二 新茶を贈る

樋口一葉

西ヶ原別荘の茶園、此の頃人雇ひ入れ候て製造にかゝら
せ申候處、今日はじめて少しばかり出来まゐり候。まことに
お一煎じ程に御座候へども、御風味下さらば、かたじけなく
存じ奉り候。彼處は遅れて咲きし躑躅の色など見すて難う、
近き麥島の黄ばみわたれるも、其の事となく、一景色候まゝ、
茶つみが唄のをかしきをも聞しめしが、てら、一日御遊びに
お出下さるまじくや。私は此のほど絶えず行きかよひ居候。
かしこ。

右の返事

同

御めづらかなるを先づ賜はりたる忝さ、いそぎ火桶に炭
さし添へ申候。いつも申すことには御座候へど、好き御場所
もたせ給ふ御うらやましさ。いかばかり御樂みにいらせら
れ候はんかと推しはかられ候。其の茶つみ唄、躑躅の色、いと
いとゆかしう存ぜられ候へば、此の頃かならず御あと追ひ
申すべく候。此の羊羹、折から貰ひ合せ候まゝ、御紙代りにま
で。かしこ。

一三 マヂソン夫人

下田歌子

(一) James Madison.
(二) Washington, 合衆國の首府。
辭令に巧

(三) Jefferson, 第三代の大統領

冷淡
畏敬
悦服

ジエームス・マヂソンは結婚後數年にして、北米合衆國の内務卿となつて華盛頓府へのぼつた。マヂソン夫人は天性溫和で、愛嬌があつて、辭令に巧な人であつたから、誰でも夫人に遇つて愉快を感じない者は無かつた。マヂソンが時の大統領ジエッフアーソンを助けて衆望を集めたのは、重に夫人の力によるのであつた。

マヂソンは性質極めて剛直で、どちらかといへば、ちよつと冷淡に見えるので、他から畏敬こそされるが、悦服される徳には乏しかつた。之に反して、夫人は如何にも溫和な愛嬌のある人で、そして思ひやりの深い慈惠心に富んだたちであつたから、ちやうど夫の短所を補つて、大いに其の事業を

助け得たのである。縱令マヂソンの反對黨でも、一度夫人に接すると、忽ち其の反抗の鋒が折れて、遂には敵對することが出来ぬやうになつたといふことである。

マヂソンはかくの如き良妻の内助を得て、遂に前後二回大統領に選舉せられた。滿八年の在職中、或は内憂外患ごもごも至つて、其の勞苦困難は一通りで無かつたにかゝはらず、幸に内には夫人の慰藉あり、外にもまた夫人の助勢を得て、大いに其の難局を切抜けることを得た。

任滿ちてめでたく郷里バージニヤのモントピリアといふ所に退くや、此處に廣い邸宅を構へて、高年の母と共に住つた。或時、某夫人がマヂソンの母を訪聞すると、九十五歳

難局
(四) Virginia, 州の名。
(五) Montpelier.

老嫗

御伽

眼を見張る

(*) White House, 大統領の官舎。

の老嫗は眼鏡をかけて編物をして居た。婦人はこれに向つて、「お退屈では御出でなされませんか。」と問ふと、老嫗はほゝ笑んで、「いゝえ、お蔭ですこしも退屈致しません。まだ編物や書物が御伽をしてくれますから。それに、母が能く私を慰めて、手となり、足となつて、私の思ふとほりにしてくれませう。一向困りません。」と言はれた。で、其の夫人は、「えゝ、あなたのお母御様とは、どなたでいらつしやいますか。」と眼を見張つていふと、老嫗は、「あれ〜彼處に。」と指さす。見ると、媳のマヂソン夫人が濡れた手を白い前垂で拭ひながら、今隣室から出てくる所であつた。(六) ホワイト・ハウスで華やかな美服を着て居られた時に引替へ、籠末な地味な衣服、臺所の用事をして

扮装

居られたのかとも見える扮装。まるで純然たる農家の主婦であるが、其の氣高さ奥床しさに、客の婦人は感にうたれて、暫時媳と姑とを等分に見比べて居ると、両人は顔を合せてにつことほゝ笑んだ。なる程老嫗が母と呼ぶのも無理はない。夫人の態度は眞に慈母が愛兒を視ると少しもかはりは無かつた。

で、其の婦人は歸つてから人に語つて、「マヂソン夫人は交際に巧な、快活な圓滿な人として世に響いて居るが、私は却つて、一農家の主婦として能く其の家政を理め、能く其の姑に事へる天晴な良妻として見た方が遙に貴いと思ふ。誠に花の美なるも實の佳なるには及ばぬ。」と感歎したといふ。

——良妻と賢母——

一四 勤 儉

細川潤次郎

意義

審に：：の
みならず

勤と儉とは二箇の意義なれども、大方は相類似せるものにて、共に修身の要件たり。勤儉は事實にあらはるゝものなれども、其の本は我が心に在りて、心中の勤儉を身の行爲に見するものなり。勤儉は啻に修身の條件たるのみならず、抑、亦治家の要件なり。古人、勤儉を以て家を治むる本とせり。此の心がけなくば、家を治むること能はざるべし。何事にて、勤勉ならざるときは、其の執る所の業を全くすること能はずして、之に對する報酬を得ること能はず、家道の成立すべ

相須つ

きやうも無かるべし。又たとひ勤勉にして財を得とも、之を用ふるに節儉ならざるときは、之を蓄積すること能はずして、勤勉の功全からず。故に勤と儉との二つは、相須ちて用をなすものと知るべし。

慎思熟慮

輕舉妄動

勤勉は時をも事をも擇ばずして、人の常に心掛くべきことなれども、また其の効果を慮らざるべからず。凡そ事を爲すに先だち、慎思熟慮して、其の必要なると不必要なるを分別し、不必要なることには心を用ひず、有用にして成功の確實なるべきものを選びてこれに従事する時は、勤勉の効果を待たねども、若し徒らに身心の活動にのみ一任して、輕舉妄動するが如き事あらば、其の事は勤勉に似たりとせ

勤、所以
程度
刻果
考是ヨ

徒勞

んも、所謂徒勞にして益なきのみならず、或は失敗に陥りて、悔ゆとも及ばざることあるべし。且又精神の作用にも、身體の勞動にも、自然の制限あるを以て、精神も身體も共に過勞するときは、健康に害あること固より論を待たず。此の故に、勤勉は必要なれども、休息も必要なり、睡眠も必要なり、時々出游して快樂を覺ゆるもまた必要なり。そは、休息も、睡眠も、出游も、皆勤勉を保續するに必要なればなり。はた又勤勉時間に於ける勤勉も、常度を守るべくして、過度ならぬがよし。すべて事を爲すは、輟めず怠らざるやうにせば、事足りぬべし。時に由りては、非常の勤勉を要することもあるべけれど、非常の勤勉は、永く繼續すべきものに非ず。譬へば、人の道

常度

倍道兼行

を行くが如し。倍道兼行する時は必ず大いに疲勞して、長き時間の休息を要するものなればなり。 儉とは節約して浪費せざることなれば、別に深遠なる意義は無きやうなれども、儉約の程度は、人々の身分に隨ひて同じからず。每人毎事、考慮を要することなるべし。其の身分に由り、儉約の程度を取違へたる時は、其の儉約は、儉約に非ずして、儉約以外の名を下すべきものとなるべし。貧賤なる人にして、富貴なる人の儉約を學ぶ時は、其の儉約は猶奢侈たることを免れず。富貴の人にして、貧賤なる人の儉約を學ぶ時は、其の儉約は全く吝嗇となるべし。此等の程度は、分別すること容易ならず。時としては分別すべからざること

儉、所以
程度、
衛生、
道徳

斟酌 つ生財有大
道生之者衆
食之者寡爲
之者疾用之
者舒則財恆
足矣(大學)

あるべければ、實際に就きて斟酌すべし。要するに、之を生ずること多く、之を食むこと寡く、之を爲すこと疾く、之を用ふること舒なり。といへる格言の如く、すべて支出の収入に超過せざるやう心掛くる時は、儉約を實行するにつきて、大いなる過なかるべし。

己に奉ず

己に奉ずる儉約は、家道の貧富に準ずること勿論なり。但し、貧者の儉約を實行するに於いて、粗衣粗食して陋屋に住するは、固より己むを得ざることなれども、費用の許す限りは、衛生の道に負かざるやう心掛くべし。衣は粗なりとも、温暖にして垢汚なき時は、木綿も絹帛に異なること無かるべし。食は粗なりとも、烹飪宜しきを得て味悪しからぬ時は、

尋常の茶飯
も膏粱に異
ならず

尋常の茶飯も膏粱に異なる所無かるべし。家屋は掃除して、良く風氣を疏通せしむる時は、陋屋も廣莊大廈に異なること無かるべし。衣食住の費用を支拂ふには、少しく其の額を増すことありとも、苟も其の事衛生の道に合ひて身體健康なる時は、其の健康なるに由りて得たる勤勉の功に由り、其の費用を償ふことを得べし。若し然らずして、儉約の濫用に由り、健康を害するが如きことあらば、何事にも勤勉すること能はずして、得べき財をも得ざるのみか、或は療養の費用を支出すべきことさへありて、甚だしき不利を來すべし。故に儉約の濫用は儉約に反對するものなり。

上に述べたる勤儉を適當に實行するときは、漸々家道に

之の結

(二)倉廩實則知禮節。衣食足則知榮辱。(管子)

餘裕を生じ、倉廩實つべく、衣食足るべく、禮節を知ることを得べく、榮辱を知ることを得べくして、其の修身に裨益あること、固より論を待たず。

—修身要領—

一五 國民としての女子

兄弟七人男揃にて一人の女の子なき家もあり、生るゝ子も生るゝ子もみな女にて一人の男の子なき家もあれど、一都市、一國の平均より見れば、男女の数の大抵相等しきこと、人口統計の示す所なり。されば、日本國民七千萬といへば、其の約半數三千五百萬の女子たるは言ふまでもなし。

國の強盛繁榮の進運に向ふも、萎靡不振の状態に陥るも、

向上の志

其の國を構成する國民の志氣如何にあり。國民にして向上の志なく、遊惰にして産業に勉めざれば、其の國遂に亡國たるを免れず。之に反して、國民皆勤勉にして新銳の氣力に満てば、其の國必ず興る。これ既往四千年、世界歴史の證明する所なり。

男子と女子とは務むる所各異なり。男子は主として外に在りて職業につとめ、女子はむねと家に在りて家政を治む。然れども、其の國家に對する奉公の精神は同じからざるべからず。如何なる業務に服する人も、我が國民七千萬中の一員たることを忘れず、女子が内に居て家を治め子女を教育するに當りても、これ即ち國家奉公の重大任務を盡しつゝ

關與

弓梢の調
手末の調

あるなりといふ一念を肝要とす。一切の國家的事業は男子の手に在り、女子は毫も之に關與することなしと思はゞ、我が國は已に三千五百萬の國民を失へるに同じ。

古へ崇神天皇の御代、男子には弓梢の調、女子には手末の調を奉らしめ給へり。これ男女均しく國家に盡さしむる意なり。手末の調は必ずしも女子が手藝の製作品をのみいふにあらず。もしくは精神上より、又は體力上より、女子として國家に盡すべき道は多々あり、其の任務の重大なる、男子に等しきことを自覺せよ。

自修文

一六 醫者の來るまで

負傷や病氣は手當が後れると取返しのつかぬことあり、深夜又は不便の地で、醫師の間に合はぬこともあるから、一通りの應急手當を心得て置く必要がある。

切創は切口を押へ、創の周圍を硼酸水か清水で洗ひ、ガーゼを當て、繃帶を施すがよい。それでも出血が止まなければ、創口の少し上の方を固く縛る。軽い創には取敢へず絆創膏を貼つて置く。

火傷には直ちに油を塗る。これは空氣に曝すのを避ける爲である。皮膚が赤く腫れて多少の痛みを覺える程ならば、冷水で冷す。又水泡を生じた時は、綺麗にした針で其の縁の方を刺して水氣を取り、硼酸軟膏を塗るがよい。忘れても其の皮をむいてはならぬ。ランプの火が衣服に燃廣がつた場合には、すぐ其の人をねかし、着物、蒲團、毛布の

水泡
水ぶくれ。

ピンセット
毛抜のやうな
形し細くて物
をはさむ器
具。
含嗽
うがひ。

類を手早く掛けて押へれば、火は忽ち消える。あわてゝ水を掛けるのは極めてあぶない。
水に溺れた者の手當は、先づ衣服を脱がせ、腹を己が膝の上に當てゝうつぶしに臥させ、其の胸部を低くして、少し頭を反らせて、水を吐かせるのである。それでも蘇生しなれば、人工呼吸法を施す。人工呼吸法は仰向に寝かして、子供なら胸の両脇を押へては離し、押へては離し、大人ならば其の両手を靜に上下して、呼吸を促すのである。
咽喉に骨のさゝつたのは、飯の塊か卵の黄味を丸呑にする。それで取れなければ、ピンセットで取る。取つた後は食鹽水で含嗽するがよい。
咽喉に物のつまつた時は、其の背を一二度強く打ち、或は指を深く入れて吐氣を催させる。若し貨幣、硝子球等を

スポイト
ポンプの用を
する小さい器
具。

点滴
たらすこと。

嘔下して吐出させることの出来ない時は、飯、いも、とろゝ等軟いものを澤山食はせ、便通と共に排出させる外は無
い。
耳の中に豆粒や蟲などのはいつたのを簪などでむやみに搔くと、却つて奥の方へ押込む虞がある。長い木綿針の先を焼いて、其の先を曲げて引掛ければ取出すことが出来る。細かい物のはいつた時は、スポイトを用ひて微温湯で耳の中を洗ひ、或はオリーブ油四五滴をさせば、おのづから流れ出る。目にごみのはいつたときは、成るべく手でこすらぬやうにし、清水を脱脂綿又は清潔な布片に浸して眼中に点滴するか、又は眼瞼をかへして除き去るがよい。
蟲に螫された時には、アンモニヤ水を塗る。蝮に噛まれ

人事不省
俗に正氣を失ふといふ、何事も分らなくなること。

卒倒
人事不省になつて俄に倒れること。

中毒
食物にあてられること。

た場合には、取敢へず創口の周圍を成るべく廣くつまんで、出来るだけ血をしぼり出し、上部を手拭などで固く縛り、早く醫師の診察を請ふがよい。
高い處から落ちて人事不省となつたのは、腦震蕩といつて、極めて危険なものである。此の場合には靜に臥させて、身體の安靜を保つのが大切である。起したり坐らせたりしてはならぬ。足部が冷えれば湯たんぽを入れ、發熱があれば頭を冷す。卒倒するのは腦貧血が多いが、其の時は頭を低くして靜に臥させて置く。
中毒と見たら、其の食物を吐かせる工夫をしなければならぬ。それは指を口の中に深く入れて咽喉をなでまはして吐かせる。若し吐かなければ、微温湯、牛乳、茶等を多量に飲ませて、其の毒を薄めるやうにする。中にも牛乳は最

痙攣
俗にひきつけといふ。其の狀態は白眼をひへし手足を震はせる。

下腿
脚の裏下。

覺醒
氣がつくこと。
窒息
息がつまること。

も効が多い。

子供等が痙攣を起したときには、何病にかゝはらず、先づ靜に床に就かせ、熱があれば頭を冷し、便通が無ければ灌腸を施す。痙攣が長く止まなければ、芥子と罌餈粉を等分に交ぜたものを湯か水でこねて、半紙に厚く二三寸四方にのばし、紙の間に挿んで、下腿の内側に五六分間貼る。但し其の部分が赤くなつたら取去つて宜しい。又一時の痙攣ならば、冷水を其の顔に吹掛ければ覺醒する。強ひて服藥をさせると、藥液が氣管に流れ込んで窒息させることがある。

如何なる場合にも決してあわてること無く、直ちに必要な處置をして醫師の來診を待つのが、應急手當の精神である。

— 國定高等小學讀本 —

一七 筑紫の旅

幸田露伴

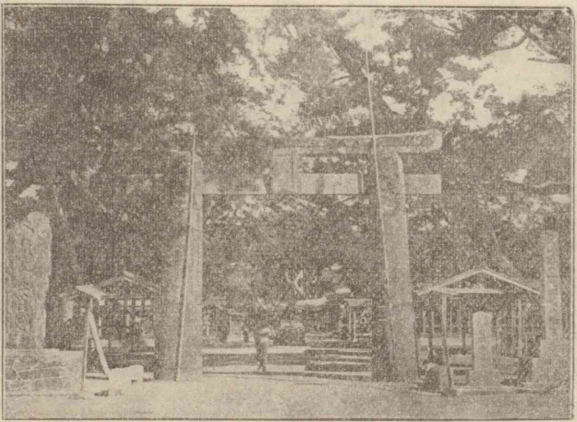
盤臺
祭文

(一)福岡市内。
(二)官幣大社。應
神天皇、神功
皇后、玉依比
賣を祀る。
遠白し
煙波渺茫

六月十五日朝九時頃馬關に着く。市街は一般に道幅狭し。物の價貴く、人の勢鋭く、米商會所賑し。物賣る女の盤臺を戴けるも珍しく、祭文めきたるものを歌ひながら、弾じて錢を乞ふ乞食なども眼新し。

十六日朝まだき、船にて博多^(一)に渡る。筥崎^(二)の八幡宮に詣でんとて、濱傳ひに十餘町ばかり、松蔭翠に沙遠白き間を辿りて行く。八幡宮は海に向ひて鎮座あり。煙波渺茫^(三)として、遙に朝鮮、支那と連る。金字眩く、「敵國降伏」と讀まるゝ醍醐帝の宸筆を摹寫し奉れる額のかゝれる、いと畏し。三拜して博多の

町に歸る。



宮 幡 八 崎 筥

十七日、昨夜の宿の寝心地よきについ寝すごして、十時發の汽車に乗りて二日市^(三)に着す。濛々と煙る雨を冒して、直ちに太宰府^(四)に到るに、府中の町名に梅大路などいへるがありて、昔しのぼる。晝餉たぶべく、豫め定めたる家に行き預け置きて、菅公廟に詣づ。廟はもとより丹碧金銀を施さざる素樸のものなるが上に、星霜を経たれば、いと神さびて何となく尊

行李

(三)福岡市の東
南なる鐵道
驛。
(四)筑前筑紫郡。

さびたる廻廊
苦むせる捨石

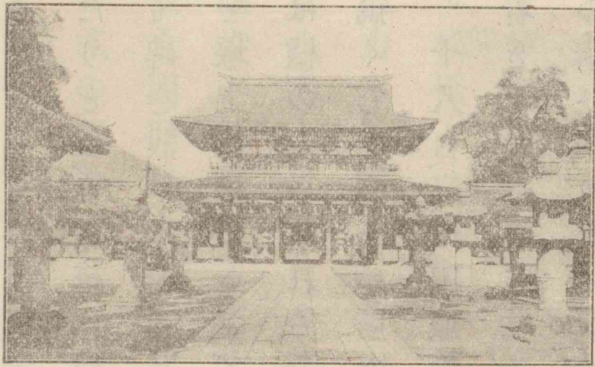
(五)筑前國筑紫郡山上に荒穢神を祀る。

(六)九州鐵道の幹線に當る。

し。太鼓橋の高く架せる、神池の靜に水を湛へたるも、皆景致あるに、ことさら雨の霏々と降れば、さびたる廻廊、古き梅の樹、苦むせる捨石などの濡色一入面白く、廟後に數ある小祠の、我等が歩むにつれて隱見し、小さき瀑布の、常にはましてと覺しく、勢よく落つるも亦興あり。池邊に蔭暗きまで生ひ茂りたる大樹あるを、友は指ざして、此の樹必ず蒙古事件を傍觀せしなるべし」と評しけり。

畫餉を終へし後、模糊たる天拜山を雨中に望みながら、宰府を出づ。宰府、二日市の間には路傍に櫨の木多く、大抵藁繩をもて、枝を其の幹に結びつけ、實の熟するにつれて、重さの増すとも、枝の折るゝこと無きやうに備へたり。此の夜は久

留米に宿す。



太宰府天滿宮樓門

後に思へば、筑前に櫨樹多くして、人民其の益を受くるは、筑紫郡山田村の人高橋善藏といふ者の遺澤なりき。善藏は貞享元年(七)に生れ、寶曆九年に歿せしが、享保年間(八)に櫨の實の効益あるを聞き、自ら薩摩、肥後に赴きて栽植培養の法を學び、歸村の後試み作りしに、果して利益多かりければ、斷然畑作を改めて、櫨樹を栽培しけり。定まりたる利ある畑作を改めて、眼慣れぬ櫨樹を植

遺澤

(七)靈元天皇の御代。(二三四)

(八)桃園天皇の御代。(二四一九)

(九)中御門天皇の御代。(二三三七六—二三九五)

卒塔婆

ゑたるを見て、村民は初こそ嘲り笑ひたれ、後には其の利多
きを知りて、倣ひ植うるに至りしより、遂に今日あるを致し
たりとぞ。善哉死に臨める時、我が亡き後のしるしには、石も
て碑を設け、木をもて卒塔婆を建つるに及ばず。たゞ櫨の樹
を塚上に植置きてくれなば、我が願足れり。我が一生の精神
は櫨の樹に籠れるなれば、遺言しける由。心を存すること
篤くして、いと殊勝なるものといふべし。

(5)(2) 皆共に
肥後國。

十八日、高瀬(5)、田原坂(2)など十年役の古戰場を過ぎて、熊本に
着きたれど、暑さにあたりて苦しき上、足さへ痛めたれば、友
の購ひ歸りたる名物朝鮮飴を味ひしのみにて、其のまゝ眠
を貪りぬ。

了ふるすな
はち

(2) 肥後四大河
の十一里、長さ二
十一里。

(3) 肥後國宇土
郡。熊本市の
南四里。

(4) 同國下益城
郡。宇土町の
南一里半。

(5) 薩摩國出水
郡の海濱にあ
る小驛。

眼を遮る
父母ある者
のなすべき
事か

十九日の朝起出でて見れば、足の痛みは異ならねど、頭の
重きはやゝ薄らぎたり。いざとて朝餉を了ふるすなはち、車
を僦ひて、此の地を立出で、緑川(3)を越えて宇土(3)に至り、宇土よ
り松橋(4)といふ船つきの淋しき町に到り着きぬ。此のあたり、
人力車の轆みな象の牙のやうに天仰ぎて反れるを、友と怪
しみ噂しけるに、今また薩摩の米(5)の津まで海路二十五里を
越ゆべき筈にて僦ひたる舟の來れるを見れば、こはいかに、
長さ四間にも足らざるべき小舸なり。處の習にて、車の形、舟
の式の異なるはいふにも足らねど、烟波く森々として、島山遠
く蜿蜒たる外には、眼を遮るもの無き此の灘を、かゝる舟に
て渡らんこと、父母ある者のなすべき事かと、しばし怪しみ

迷ひけるが、旅人は皆これにて渡る習なりといふに、聊か心
強くなりて、遂に乗込みたり。

(六)八代海中に
在る小島

(七)又の名瀬戸
上島。八代海
の西。

風蓬々

初は風乏しくして、舟の行くこと極めて遅かりしが、暫く
して強風起りければ、(六)榎島(七)天草上島の間
に避けたり。石灰焼けるが見ゆる迫門を出果つるころほひより、よき程に風蓬ほすと吹出し、十分に張りたる白帆の破れもするかと見ゆるまで膨み孕みて、少し傾きたる船の舳先の、水に突入るばかり烈しく浪を截つて進む快さ。駿馬に鞭うちて曠原を馳するとは、また異にして趣あり。

(八)米の津より
北三里半。

曠原

水(八)役の沖を過ぐる頃、太陽西の方に沈めば、雲は赤金の色
をなして輝き、浪は鎔けたる鐵の焰を揚げて流るゝが如し。

舷を拍つ

面白の眺かな。歌も及ばじ、畫も及ばじと、友と共に舷を拍つ

うば玉

て賞歎する間もなく、日輪全く没して、暮煙蒼然と海上を罩め、舟の中の隅々次第に薄昏くなり、浪の頭の雪を捲くやうなるばかりぞ、ほの白く見えぬ。さすがに漁火も見えず、行きかふ舟に逢ふ事もなき海上の孤舟にて、うば玉の暗き夜に入りたる、何となく心細く、舟子の吸へる煙草の火の唯一點、此の暗の中に赤く見ゆるなど、詩興としては自らをかしと思はざるにあらねど、實は少しく愴然として、物言ふことも少くなりゆきたり。夜更けてやうく、米の津に着きぬ。旅宿を擇ぶ暇もなく、舟子の導くがまゝに、いと**いぶせき家**に宿る。

詩興

いぶせき家

——まき筆日記——

(Japan.)

一八 漆 器

日本の國號のジャパンといふ語は、英語にては漆器の意味にも用ひらる。外人が日本を漆器の本場と見做せることを察知すべし。漆器は古くより支那にも産し、又近年獨逸國にて模造品を産すれども、共に見るに足らず。日本漆器の輸出は年額百萬圓以上に及ぶ。

漆器の産額は石川、静岡二縣最も多く、各百二三十萬圓に達し、和歌山、愛知、福島、新潟等之に次ぐ。静岡縣の漆器は専ら外國に輸出せられ、我が國輸出漆器の大部分を占む。弘前の津輕塗、秋田の能代春慶塗、會津の會津塗、能登の輪島塗、加賀

顔料

の山中塗、福井の若狹塗、新潟の堆朱塗、紀伊の黒江塗、飛驒の飛驒春慶塗、高松の象谷塗、久留米の久留米塗等著れ、京都、金澤、神奈川、愛知等の漆器亦稱せらる。

塗方より區別すれば、平塗といふに二様あり。一は木地に顔料を施し、其の上に直ちに漆を塗りて木地の見ゆる様に仕上げたるものなり。飛驒及び能代の春慶塗の如きこれなり。二は漆に顔料若しくは金銀貝殻等の粉末を混じて塗上げたるものなり。普通の朱塗、黒塗、青貝塗、梨子地塗等之に屬し、各地の製品中に多し。

地紋塗は彩漆を用ひて種々なる模様を塗出したるもの。堆朱は朱塗を厚く塗り、山水花鳥等を彫刻したるもの。いづ

れも美術製品に屬す。就中蒔繪の漆器を漆器工藝の王とす。

一九 原總右衛門の母

下田歌子

勅使下向
采地

播州赤穂の城主淺野内匠頭長矩、元祿十四年の春の三月、勅使下向の際、殿中に於て吉良上野介義央を刃傷に及びける罪科によりて自盡を命ぜられ、采地を没収せられぬ。是故に其の老臣大石内藏助良雄は原總右衛門元辰等と相謀りて、主君の爲に復讐の企をなしけり。
爾後大石は京都に住し、原は猶止りて赤穂の城下に住し、時々密使を交換し、書狀を以て互の意思を通じたりけるが、

日子

譜第恩願の
主

一日總右衛門は老母の傍に侍して、さまざまの物語の序に申しけるは、此の度餘儀無き用事出で來て、京都へ登らんと存候が事によりては江戸迄罷り越すやも計り難く、さ様の事にも相成候はゞ、一月餘は日子を費し申すべし。留守は定めて御徒然にて、御不自由の程もさこそと推量り參らすれども、いかで暫時身の暇を賜ひ候へ。といふ。母はつくづくといふ。我が子の顔を打ちまもり居たりしが、いや／＼、汝一度此處を去りて江戸表へ罷り越すならば、よも再びは歸り來らじ。これ今生の別なるべし。といはるゝに、總右衛門打驚きて、如何に答へんとたゆたふ程に、母は重ねて、汝驚くこと勿れ。そも武士の家に生れて、譜第恩願の主の爲に身を致すは、誠に

(一)范巖曰く爲人臣者君憂臣勞君辱臣死(國語)

修羅の妄執

至當のことならずや。古語に曰く、『君辱めらるゝ時は臣死す。』と、忠孝両全は爲し難き事なり。必ず母に心を残さずして、一日も早く亡君の爲に修羅の妄執を晴し奉り、忠義の道に潔く相果てんこそ母のこよ無き望なれ。何のたゆたふ事かは。』と勵まされたる母の詞に、總右衛門は覺えず感涙に咽び、誠は早くより大石殿と心を合せて、内々復讐の準備を整へ候へども、事の漏泄を恐れて、父母妻子にも語るまじとの神文誓詞を仕候故に、今日迄母上にも御明し申さざりしを、何卒御免し下されかし。』と申しければ、母大いに悦びて、急ぎ旅立の用意ども取整へてぞ出し立てける。

(二)山城國宇治郡。

漏泄
神文誓詞

さて原は山科(二)なる大石が家に往きて見るに、近き頃より

呻吟
病愈る
後安し

良雄は病床に在りて呻吟したりければ、いたく驚き憂へて心を盡して看護しけるに、病は思ひしよりも頓に怠りがたに成りぬ。今は後安しと思ふものから、猶關東へ下らんことは覺束なく、暫時かくて保養あるべきこと、人々も言ひあひけり。總右衛門もげに然るべしと同意して、さらば我も今一度立歸りて、母の安否を問ひて來んとて、更に赤穂へ取つて返し、しかぐと告げけるに、母も初は何事か打案じ居たるが、漸くに氣色直りて、さらば久々にて諸共に一獻酌まんと、手づから調じて子にすゝめ、我も盃とりて、宵過ぐる頃迄いと心地よげに打語らひつ、明日を契りて各臥戸に入りぬ。かくて夜明け、日は昇れども、母の起出で來らざるに、總右

調じて

いぶかしむ

衛門いぶかしみて、下婢をしてやをら其の寢所を伺はしめ
けり。下婢は寢所に入るや否や、あつ。と叫びて轉び出でたり。
原驚きて走り入りて見れば、こはそも如何に、母は懷刀に喉
をさし貫きて自盡し、うつ伏しに臥し居たり。あまりの事に
涙も出でず、騒ぐ心を強ひて押鎮めて、物やあるとあたりを
見れば、果してそが枕邊に一封の書あり。披きて讀めば、かく
ぞ書きたる。

一筆申し残しまゐらせ候。常々孝心深き事は詞にも述盡
し難し。殊更母の事を思ひて、故郷へ立歸るなどの心づか
ひ、我が身にとりては如何ばかりか悦び入り候へども、ま
づ討入といはん時、ふと母の身の上を思ひ出し給ふなら

内兜を見ら
る

ば、遑む勇氣も忽ちくじけて、敵に内兜を見られ給はんか。
これ全く母の存命故と存候まゝ、惜しからぬ老の命、今宵
先立ち申候。是も子を愛する道にもあらんと、女心の一筋
に思ひきはめたるに候。此の上は跡に心残なく、吉良殿は
亡君の仇、母の敵と思ひつめ、討入り給ふものならば、鋭き
手柄を致され候はんと安堵致し參らせ候。何事も最期を
急ぎ、匆々申し残し候。

安堵

母

總右衛門殿

總右衛門は此の遺書を見て、心弱く立歸りしことを後悔
すれども、今は何のかひあるべきにあらねばと、益、志を勵ま

して、直ちに京に取つて返しぬ。かくて吉良家討入の夜は、此類無き手柄をあらはしけりとぞ。誠に、此の母にして此の子あり。とは此等の事をやいふべき。されど我が子を勵まさんとして自ら死を急ぎし母の心は、いと傷ましくも口惜しき事なりかし。

二〇 ピラミッドとスフィンクス

徳 富 蘆 花

余は丘を登りて大ピラミッドの前に立つ。約五千年の昔、埃及第四朝の王ク^(一)トフーの建てし所、高さ四百五十呎、底の一側各七百六十四呎とか。天を上にし地を下にして、さまで

(一) Khufu.

風雨を閲す

基

(二) Gizeh.

匍匐

大なりとは見えぬ。五千年の風雨を閲して、稜は稍つぶれ、四面三角の其の面は處々缺損じたれど、猶何時までもと言ひ貌なり。少し劣りて一基、更に小さくて一基、外に王族、重臣の墓と云ふいと小さきもの數基。數あるピラミッドの中に、最も名高きギゼーのピラミッド群とはこれかと、やゝあきたらず思ふ。

勧めらるゝまゝに駱駝に揺られて、大ピラミッドを一周し、スフィンクスの前を過ぎて、こゝに撮影す。

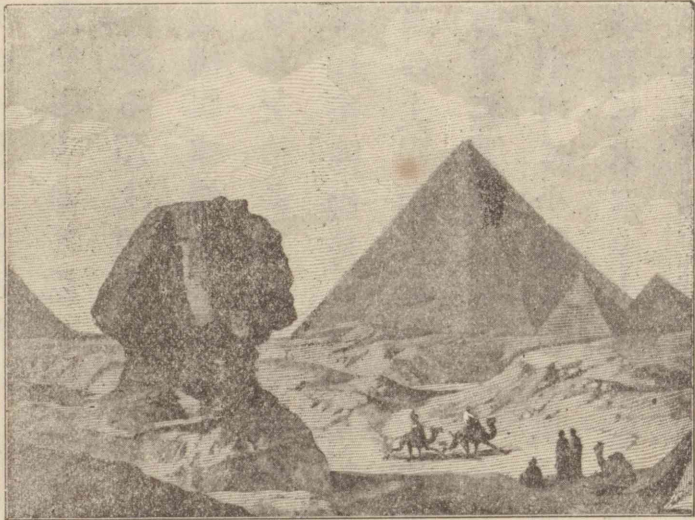
駱駝を下りて暫くスフィンクスと相對す。自然の岩を刻みて、ピラミッドより更に古しと云はるゝスフィンクス、人の顔、獅子の身にて、永久に砂に匍匐す。馬鹿者の惡戯に射的

曩昔

の的にせられて、鼻の邊缺損じたれど、曩昔の面目存す。體長
 一百四十六呎、高さ五十六呎、顛より頂まで二十八呎半と云
 へど、これも邊の漠たる爲に、さまで大なりとも思はれず。
 砂にうもるゝスフィンクスの足下に到り、更に其の肩に
 攀ぢ、轉じて發掘せられたる墓穴の、長さ一丈、厚さ四尺もあ
 るべき赤花崗石もて堅固に築けるを見、出でて烈々たる日
 光の中に立つて四顧す。スフィンクス此方であり、默然。ピラ
 ミッド彼處にあり、深青の空あざやかに立つ淡褐色の大三角。
 青天白日、物象皆明らかなり。あまり明らかに、あまり靜に
 して、却つて無きが如く、畫ならぬものに對して、猶我が眼を
 信ずる能はず。此の時、先程より附纏ひしベドインの一人、余

淡褐色

物象皆明ら
か



スフィンクスとドゥミラビ

が服の裾ひき動かして、君が
 爲に運の吉凶を占はんと
 言ひつゝ、沙の上に太陽の形を
 指もて畫がき始む。余曰く、否
 とよ。吉凶を知る者はアルラ
 アのみ。さらばピラミッドへ。
 と、彼先に立つ。
 それには及ばじと思へど、
 一人は余の右手を取り、一人
 は余の左手を取り、一人は腰
 を押し、大ピラミッドの東南

堅緻

蜿蜒

悲劇
慄然膚に粟
す

角より登る。皆堅緻なる石灰石、高さ三尺に超ゆるものあり。手をとられて跳つて登る。足がかりは十分なり。忽ち頭上の石に、二尺ばかりの腹ふくれたる灰色の蛇あり、蜿蜒す。覺えず膽を冷す。これは無毒蛇なりとて、一人手頃の石を拾ひて打殺せば、蛇は今呑みしばかりの蜥蜴を吐きて死す。吐かれし蜥蜴も己に死せり。これ五千年前の帝王の墓の上、眼前優勝劣敗の悲劇、生死一瞬の凄じきを見て、慄然と膚に粟す。

半途に小憩して絶頂に到る。二十分を費しぬ。ピラミッドは竟に大なり。人の手にて造られし墓の中、かほど大なるはあらじ。されど徒勞なるかな。

石に踞す
(三) 加洲中、阿弗利河、長さ四一〇〇哩。

簇生
(四) Cairo、埃及の首府。

赭白
(五) 加洲、阿弗利南の地方より、沙漠に互れる名なるサハラ、沙漠に連る。
(六) 阿弗利加の大部、面積三百五十萬方哩。

絶頂は約百坪の平面なり。額の汗を拭き、石に踞して眺む。東は生の王國、埃及の産の親なるナイル(三)は、今も何千何萬年の昔の如く、汪々として流れ、其の兩岸は麥黃に、野菜青く、櫻欄(四)其處に簇生す。カイロ市はナイルの彼岸、モカタム岳の下に白く、綠樹道を挟んで、一線我が脚下より其處に達す。西は死の帝國、赭白(五)きりビヤの沙漠に波濤とうねる丘の末、遠くサハラに通ふ。我が立つピラミッドを中心として、此の沙漠の端一帯は、古今に比なき大墓地。附近の幾箇のピラミッドを始として、累々たる幾千載の墓、發掘せられたるあり、石の横たはるあり。眼の及ぶ所、南にはアブシール群のピラミッドあり。更に遠くサツカラ群のピラミッドあり。眞にこれ死

はかなき我が名

の大帝國。

頂上の石には、旅人さまぐにおのが姓名を刻めり。余も鉛筆もて書き、ペドインの小刀して、はかなき我が名をピラミッドの上に留めぬ。
——順禮紀行——

二一 夏の草花

三宅 龍子

さはいへど

夏は風も親しむべし。さはいへど、なほ草花の咲誇れる庭園こそ嬉しけれ。葎、蓬といふだに、なほ我が身の程の花は咲くなり。天の愛で培へる花に、いづれか優り劣りあるべき。親しみて見れば、花といふ花には、それぐ愛づべき節の見出さるゝも面白し。

愛づべき節

やさしう覺ゆ

赤豆隠元といふを、彼岸の頃三つ四つ土にふせて置きつるに、六月の中頃よりのびぐと成長し、蔓には赤き花をつけたり。いと愛らしき花なれば、毎年之を植うるに、今は庭に無くてならぬものの様になりたり。

蔓ある草は優にやさしう覺ゆるものぞかし。自然生といふ芋を人の贈り來りしことありき。あまり細きがありしかば、垣の根に植ゑて置きしに、零餘子^{せじゆ}あまた實のりて落ちつるが、彼所此所と今年はあまた生出でぬ。竹を添へてやれば、這ひまつはりて茂りあひぬ。白き花の咲くべき頃もをかしかるべし。實のほろぐと秋風にこぼれん程、いかにあはれ深からんと楽しむ。かくふと蔓草を愛で思ふ心つきてより、

ふりおもしろし

瓢箪も植ゑにき。絲瓜も植ゑにき。のうぜんはんはれんのふりおもしろき。木通の延びんまゝにのびさせたる、皆とりぐにをかしかるべしとて、松、杉などに添へて植ゑにき。

照りはたゞ

朝顔の花はさのみ愛で思はざりしが、今年は農事試験場にいひ遣りて取寄せし芽生の、いとも見事に、獅子など名をもつくべからん花の、一つ魁けて咲きたるもをかし。南瓜の轉がれる畠に、晝顔の花の眞晝の照りはたゞく日かげを物ともせず咲出でたるを見ても、

よられたる草葉の中に咲きにけり

つゆもたのまぬ晝顔のはな

と伊東祐命(一)大人のよまれし歌を思ひ出でぬ。

(一)國學者。前田夏陸等に學ぶ。明治二十二年歿。

ほのかをる

スウィートピーのほのかをれるもなつかし。去年の秋の彼岸に種を蒔きしが、大きく丈のびたれば、竹など添へてやるに、蔓のこれに縋りて、風にゆらぐもうるはし。今年の春蒔は丈も低し、葉色も悪し。萬綠叢中紅一點とうたひし石榴も、夏の庭には面白く、花も實もこは仙人めきたり。

萬綠叢中紅一點

仙人めく

品定

仙人掌こそ面白きものなれ。冬は眠れる如くして、夏になればいやが上にも芽を出し、桃色、赤、黄などの花をつく。花は燃ゆるが如く匂へるに、それを我が上とも知らぬやうに、山の如く冷に立てる有様のをかしさよ。狭き庭を心ひろくと見渡して、花の品定しつゝ、縁に腰打掛けたるほど、昨夜の雨に萩の泥にまみれ伏したるを見出でて、あなあはれと急ぎ

歌人の香川景
樹の門人(二四
政四年)歿年四
十三

花に寄せた
る人の心

景觀

かき起せば、はや花の咲きたる枝もありけり、木下幸文が
露にふす萩の下枝かき起し
見れば花こそ咲きそめにけれ
と歌ひしを思ひ出づ。かく其の人の歌などを思ひ出でて、同
じ花に向へば、さも其の人と對ひて語りあふ心地もするな
り。花に寄せたる人の心は、今のも昔のもなつかしうこそ。

— 婦人書報 —

二二 植物と氣象との關係

植物の景觀と自然の氣象との間には、自らなる關係あり
て、互に相依り相扶けて、以て此の宇宙の美を現出するなり。

故に晴、雨、雷、風、雲、霧、露、月等の、さまざまの氣象に對する植物
の景觀に注意すれば、誠におもしろき趣あるものなり。
春の日の霞たなびきたる中に、山櫻の咲亂れたるは、誠に
趣深きものにして、其の調和の美しいふべからず。今假に此の
櫻花をして澄渡れる秋の空に開かしめば、いかなるべきか。
恐らくは其の優美艷麗なる特性は、十が一をも現ずること
能はざるべし。また春の野の霞に罩められて、をち方の山々
は淡き紫色に匂ひ、紫雲英、蒲公英などの一面に咲亂れたる
中に、蝶、蜂などのおとづれ來て、心地よげに飛狂へる光景は、
よく花曇の日和と和して、誠に長閑なる心地せらる。
新緑の候となれば、快晴の日にも、空氣は水分を含みて、何

清曉

となう夕立の雲起り來べきかと思はるゝものなるが、其の青き空に、綠滴らんばかりなる竹樹の枝さし交したるは、其の配合ことに妙にして、人をしてそゞろに夏の面白きを感じしむ。

やがて晩秋の節となれば、空氣清らかになりて、遠きあたりまで見やらるゝに、槭樹、公孫樹などの霜に色づきたるが、夕日に映えたる様など、又いひ難き趣あり。冬の末より春の初にかけては、寒さ厳しき清曉に、梅、臘梅などの雪に傲りて、いち早く咲出でたるは、氣高く心地よきものなり。

雨のおもしろきは、燕子花、花菖蒲などの咲出づる梅雨の頃なるべし。降るかとするれば晴れ、晴るゝかと思へばまた降

幽情

出でて、其の度毎に花の艶麗を増すなど、人をして限りなき一種の幽情を催さしむ。殊にこれらの植物の花弁と葉とは、おのづから雨を防ぐやうに作られたるを以て、雨滴は其の上になんか玉水となりてとゞまれるが、其の美しさ誠に形容し得べくもあらず。

驟雨などの烈しき雨にも、亦おのづからなる植物の配合はあるなり。そは多く雨滋き地に生育せる植物、又はさる地より移し植ゑられたる植物にして、かの梧桐の如きは其の一例なり。其の直立して膚青き幹、其の淺く切れ込みたる廣き葉の、一は新に洗はれて、一しほ鮮綠の色を増し、一はばらばらと音を立て、其の葉末より餘滴をしたゝらする光景

餘滴

反射

は、よく此の植物のかゝる急雨に適せるを見るべし。
蓮の葉もまた雨を受くるに適せるものなり。そは葉の表
に一面に天鵞絨のやうなる細かき突起ありて、其の間に空
氣を含むをもて、雨に遭ふとも少しも濡るゝこと無ければ
なり。かくて又其の空氣はよく光線を反射するを以て、葉の
上にとゞまれる玉水をして、一種銀色の光を放たしむ。芋の
葉も殆どこれに等しき構造をなせり。

はかなげ

蕭條

秋雨に就きて聯想せらるゝ植物は少からざれど、まづ人
の心をひくは芭蕉なるべきか。秋も末になりて、其の葉の破
れ、筋の現れて見るからはかなげなるに、寂しき雨のうち灑
ぎたる人をして殆ど蕭條の氣に堪へざらしめんとす。

しめやか

松は特に雨に適せる植物にはあらねど、其の雨に沾ひて、
細き葉の束ねたるやうになりて、少しうつむきつゝ雨滴を
滴らするさまは、又しめやかなる趣なきにあらず。

魁偉
清楚

雪は寒國のものなれば、これに適するは寒地の植物なれ
ど、暖地の植物もまたこれに遭ひて、おもしろき景色を見す
るものあり。かの常磐木の類、例へば樅、杉、松などの類の濃緑
なる葉の、純白なる積雪の下より露れたる、また南天燭の赤
き實の其の間にほの見えたる、共に色彩の配合上見棄て難
き美觀なり。又松の其の魁偉なる枝もて、竹の其のしなやか
なる枝もて、積雪の重みに堪へたる様は、一は豪壯、一は清楚
なる趣ありて、共に賞すべし。

風物

● 風の趣も亦すて難し。そよ吹く風の草木を渡りて優しき
 樂を奏する、木枯の落葉を吹捲きて凄じき音をたつる、共に
 興なからずやは。殊に野邊の芒、水邊の蘆の秋風に戦げる趣
 は、秋の風物の最もあはれ深きものなるべし。又秋の夕澄渡
 れる空に、一點の雲も無く、さしたる風の渡るとも見えぬに、
 樹々の梢のそよ／＼と打戦ぐは、いひ知らぬあはれの籠る
 ものなり。
 松濤、松籟、また一しほの趣あるものなり。平地は風吹くと
 も覺えぬに、松の梢のひとり美妙なる樂を奏し出づるは、ま
 ことに何の音ぞと怪しまる。古來幾度か詩人の吟詠に上り
 つらん。

凍雲

雲は四時を分かずをかしきものなり。春の山にたなびき
 て花かと思紛ふ白雲、夏の空に奇しく崩れかゝれる雲の峯、
 秋の野に飛迷ふ薄雲、いづれも皆とり／＼のあはれ籠れり。
 又、冬の日、かの木曾、日光あたりの樅、梅、落葉松などの生ひ茂
 れる高山を深く立ちこめたる凍雲は、まことによく幽邃の
 趣をあらはすものなり。
 霧は高原に多きものなれど、平地、平原にも亦全く無きに
 あらず。夏の頃、朝霧の立ちたる時、杉、樅などの常磐木の見え
 隠れするさま、田、沼、湖水などの一面に罩められたるさま、亦
 一種の風趣あり。
 露は夏、秋に下るものにて、朝夙く起出でて、草むらの間を

(一) 敷島の 大和
心を入るとは
ば、朝日に匂
ふ山櫻花。
〔本居宣長〕

(二) 疎影橫斜水
清淺。暗香浮
動月黃昏。
〔宋、林逋〕

行かば、其の葉毎に美しくして、恰も白玉の如くなるを見ん。殊に稻、蘆などのやうなる禾本科の植物、また歎冬などの葉の縁なる露は、規則正しく置けるを以て、其の觀頗る美なり。月は季節によりて、其の觀一ならず。春の夜は曇りがちに、朧月多し。世には此の朧月に夜櫻を配して、得難き美景なりといふものもあれど、かの朝日(一)に匂ふ山櫻の、優美にして、壯快なるには比すべくもあらず。夏の月は之に反して、頗る快活なるものなり。殊に雨過ぎし木の葉、草の葉に映じたる月光は、いひ難き涼味を生ぜしむ。中秋の満月は空にさえて、其の光誠に常と異なるは人のよく知る所なり。月夜に適せる植物はあまり多からず。かの暗香(二)の浮動を

適くとして
よからざる
なし

賞すべしといひならはせる梅なども、其の花の美觀は、なほ晝間を以て勝れりとす。されど一面よりいへば、取りいでてこれといふべき好配合の無きは、たまく以て、適くとしてよからざるなき月の美質を示せるものにして、松の月、柳の月、梧桐の月、皆とりくのあはれを具へざるはなく、さては秋野の満月、夏山の曉月など、いづれも他に求め難き景致を具ふるにあらずや。 — 三好學、植物生態美觀による —

自修文

二三 花むすびとメとツ

萩野 由之

女子教育の中に、今は手藝として編物、組物の類が行は

狩衣、水干、直垂、衣服、菊綴、水干、直垂、菊綴、花の形に組あ

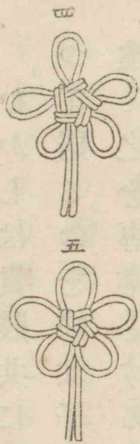
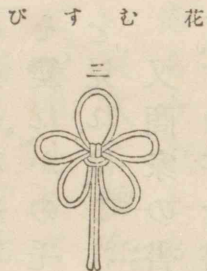
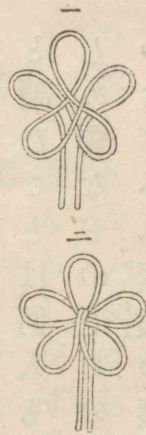
れて居るが、それに就いて思ひ起されるのは、中古の書物に散見する「花むすび」といふ事である。源平盛衰記に、清盛の息女の事を記して、「歌よみ、連歌し、繪かき、花結び、あくまで御心に情おはします」とある。此の五つは、當時女子の教育上に、缺くべからざるものとした事である。殊に花結をも其の一つに加へたのは、之を女子の肝要な藝能としたからである。

花結とは、後世の所謂結方で、絲を以て花形を種々に結び、調度の飾物、衣服の附物としたので、其の結方にも、種々の名目があり、花にも數々の品はあるが、重に菊、櫻の花の類を作つたやうである。さて此等の結物をば、狩衣、水干、直垂、又は袴につけて飾としたもので、かの菊綴と云ふのは、即ち菊の花結を附物としたからの名である。

(一) 一番古、淨瑠璃、弓手は、右手、めては

(二) 奥州より江戸の紀行、和文、不明、徳川、時代に出来た

淨瑠璃十二段草子に、牛若の装束をほめて、弓手の菊と



ちつばみし時、めでの菊綴さつと開き、蕾み開きの其の有様は、日本名譽の花結が、秘曲を盡して結ばれたりとも、此にはいかで優るべき」との文句のあるのも、全く之が爲である。

由來此のことは、奈良に都のあつた頃から既に書物に見え、二百年前徳川家の盛な頃にも、江戸の通町には、結花屋の多かつたことが、色音論といふ書物に出て居る。されば絲屋では之を作つて、一般の需要に應じたものと

二三 花むすびとびと

二二七

沿革 うつりかはり
といふ意、沿
はうつり、革
はかり。
封緘 封筒(状袋)の
封じ目

見える。
むかしは貴賤共に此の事を女兒の藝能として、之を知つて居るのを婦女子の名譽とした程であるから、後には遂に之を專業とする商店も出来たのであらう。然るに今は此の花結も殆ど絶えた様に思はれるが、併し實は品こそ變れ、かの毛絲編物などを、女の藝能の一つに數ふるのを見れば、これも一つの沿革と見られよう。
又商家の書付の合計の符號や、書狀の封緘の符號として、の字を書くことが例となつて居る。而して之をシメと讀むことは、何人も知る通りである。蓋し、シメは戸じめ、しめ繩などのしめの意から起つたもので、しめつ、ゆるめつなどいふ緊緩の義も同じ事らしい。
さて此のシメの符號に、をを用ひたのは、何故か解らぬ。

(三)徳川時代に
出来た辭書。
(四)昔の役所か
らの命令書。

古人の説も詳しくはない。或は片假名のシテをメと一字に書く様に、シメの二合字であらうとも云ひ、或は注連繩の形とも云ひ、或は封の字を甚だしく略したものであらうとの説もある。或は又只何の意味もなく、封の所に斜に墨を擦ることが、後遂に其の符號の如くになつたのであらうかともいひ、其の他色々の説がある。
又人に物を贈るに、其の包紙の進上などと書くべき所に、^ツとかくことがある。古來それが女子の慣習となつて居る。さて此の^ツの事は、和訓栞には^ツは以上なり。中世下文の終に以下とかく、これ官長より令する文書なればなり。贈物は之に反して先方を尊むなれば、以上と書く。それより書札にも以上の字を書くなり。と言つてある。然るに村岡良弼氏の説には、^ツは熨斗鯨の形状にて

其の様草略せしもの、やがてつゝとなれるものなり。文字にのしとかくと同じ。されば今の世につゝとかきて、更に熨斗包するは重複なり。」とある。

以上のべの説も、つゝの説も、諸説を列擧したに過ぎない。いづれか是非、それは見る人の考にまかす。余は新説を持たぬ。

— 讀史の趣味 —

二四 愛すべき夏

徳富猪一郎

涼自ら到る

夏の愛すべきは涼味に在り。人間煩熱に苦しむ時に於て、山深く樹密なる處に遊ぶ。此の時に於ては、風吹かずとも、涼自ら到る。己に涼味の愛すべきを知らば、炎熱も亦愛すべし。何となれば、炎熱の苦しむべきを覺えてこそ、始めて涼味の

念頭

愛すべきを感じればなり。涼味の眞價を發揮するものは、それ炎熱に非ずや。念頭是に到らば、亦是炎熱の賜をも拜謝せざる可からず。

夏の愛すべきは風なり。春風は温なり、秋風は冷なり、冬風は殺なり。夏風に到りては、すべて此等のものを調合したるものにして、纔かに一「清」字を下し得るのみ。試に幽窓を開けば、涼風一陣、緑樹の間を吹來る。此の時に於て一の帝國を擧げて吾人に與へんとすとも、殆どこれに向つて易ふ可からざる快感を生ず。

涼風一陣

餘蘊 (一) 樂みは夕顔
は棚の下涼、男
二布し、女

夏日の愛すべきは黄昏なり。樂みは夕顔棚の下涼の古歌、説出して復餘蘊なし。何等の無邪氣なる快樂ぞ。而して更に

(一)月見れば千
千に物こそ悲
しけれ。とは、
身一つの秋に
はあられど。
(古今集、大江
千里)

愛すべきは宵なり。殊に月宵なり。月見れば千々に物こそ悲しけれ。とは、畢竟秋月に對して言ふなり。夏月に至りては、大月盆の如く、盤上の西瓜と其の大を競うて、松間より洩來る。此の時に於て子女父老團欒して笑語す。亦是人生の至樂にあらずや。

拍々然

宛轉

仙界

夏の愛すべきは晨なり。荷花の拍々然として開き、其の幽香を洩し、露、水晶の如く其の翠蓋の上に宛轉たるを見れば、仙界我を距る遠からざるを覺ゆ。或は早起して庭上を歩す。仰ぎ視れば曉星天に在り。俯して視れば牽牛花二三、夢の如く籬邊を綴る。人此の時に於て一箇の罪念を容るべき地なし。

殷々

高天厚地

夏の愛すべきは驟雨に在り。殷々たる雷車天外より轟き來り、電一閃又二閃、天外より銀箭飛來るは、あたかも關東勢が楠公の藁人形に向ひて射下す箭よりも急なり。雷激し、雨激し、風も亦激す。高天厚地、殆ど合圍の如し。此の時に於ては恰も天河を翻し來りて、人間の煩熱を洗ふものの如し。須臾にして雷歇み、風歇む。七色の長虹は上帝の佩びたる勳章の如く、天の一方より地の一角に横たはる。此の時の快亦言ふ可からず。言ふ可からざるに非ず、言ふ能はざるなり。

二五 椰子の實

島崎藤村

名も知らぬ遠き島より

流れ寄る椰子の實一つ。

故郷の岸を離れて、

汝はそも波に幾月。

舊の樹は生ひや茂れる。

枝はなほ影をやなせる。

渚を枕

われもまた渚を枕、

孤身の浮寝の旅ぞ。

實をとりて胸にあつれば、

流離

新なり流離の憂。

海の日の沈むを見れば、

たぎる

たぎり落つ異郷の涙。

思ひやる八重の汐路を、
いづれの日にか國に歸らん。

——藤村詩集——

二六 十訓抄と著聞集

一 都良香

都良香竹生島(一)に参りけるに眺望心(二)にすみて、三千世界眼
前盡(三)といふ句を作りて、其の末を案じ得ざりければ、靈天託
宣を下して、十二因縁心裏空(四)と、一句くはへ給ひけり。

同じ人羅城門(五)を過ぐとて、氣霽風梳新柳髮(六)と詠じたりけ
れば、樓上に聲ありて、氷消浪洗舊苔鬚(七)とつけたりけり。良香

(一)儒者。初名言道。文章博士。元慶三年(一五三九)歿。年三十六。
(二)琵琶湖の北部に在り。
(三)平安京の正南門。

(四)菅原道真。

菅丞相の御前にて、此の詩を自讃し申しければ、下の句は鬼の詞なり。とぞ仰せられける。(十訓抄)

(五)歌僧。後鳥羽天皇頃の人。

二 能因法師

能因入道、伊豫守實綱に伴なひて彼の國に下りたりけるに、夏のはじめ、日ひさしく照りて、民の歎あさからざりけり。神は和歌に感應し給ふものなり、試に詠みて、三島に奉るべき由を國司頻りにすゝめければ、

天の川苗代水にせきくだけせ

あまくだります神ならば神

と詠みて、みてぐらに書きて社司して申し上げさせければ、

(六)三島神社。伊豫國宇摩郡三島町にあり。

みてぐら

あまくだります
天降る
雨

甲並

(七)太宗のこと。貞觀は太宗の年號。

炎旱の天俄に曇りわたりて、大いなる雨ふりて、枯れたる稲葉おしなべて緑にかへりにけり。忽ちに天災をやはらぐる(七)こと唐の貞觀のみかどの蝗を吞めりける故事にも劣らざりけり。

この入道は至れるすき者にてありければ、

都をば霞とともにたちしかど

あきかぜぞふく白河の關

と詠めるを、都にありながらこの歌を出さんこと念なしと思ひて、人にも知られず久しく籠り居て、色黒く日にあたりなして後、陸奥國のかたへ、修行のついでに詠みたりとぞ披露しける。(古今著聞集)

念なし

承慶元年護
寺僧より傳
正位せらる
延保六年
延保六年

(八)名は覺猷。
畫の名手。
延六年(一)
八〇寂。
年八保 戲

(九)鳥羽法皇
入興

鳥羽僧正(八)は近き世には竝なき繪かきなり。法勝寺の金堂の扉の繪かきし人なり。

いつほどのことにか、供米の不法のことありけるとき、辻風の吹きたるに米の俵を多くふき揚げたるが塵灰の如くに空にあがるを、大童子法師ばらがはしり寄り取りとどめんとしたるを、さまざまにおもしろう、筆をふるひて書かれたりけるを、誰がしたりけん、その繪を院御覽じて御入興ありけり。その心を僧正に御尋ありければ、あまりに供米不法に候ひて、實の物は入り候はで、糠のみ入りてかるく候ふゆ

三 鳥羽僧正

ゑに、辻風にふき揚げられ候ふを、さりとはとて、小法師ばらに取りとどめむとし候ふがをかしう候ふを書きて候ふ。と申されければ、比興のことなりとて、それより供米の沙汰嚴しくなりて、不法のことなかりけり。(古今著聞集)

四 松葉仙人

河内國金剛寺(五)とかやいふ山寺に侍りける僧の松の葉を食ふ人は、五穀を食はねども苦みなし。よく食ひおほせつれば、仙人とも成りて飛びありく。といふ人有りけるを聞きて、松の葉を好き食ふ。誠に食ひやおほせたりけん、五穀の類食ひのきて、やうく、両三年に成りにけるに、げにも身も軽く

(五)河内國南河
内郡天野村。
行基の開基。

なる心地しければ、弟子どもにも、我は仙人になりなんとす
るなり。」と常はいひて、今々として、内々にて身を飛びならひな
どしけり。

すでに、「飛びあがりなん。」といひて、坊も何も弟子どもにわ
からゆづりて、「あがりなば仙衣を着るべし。」とて、かたのごと
く、腰に物をひとへ巻きて立出づるに、「我が身に、是より外は
いるべき物なし。」とて、年比秘藏して持ちたりける水瓶ばか
りを腰に附けて、すでに出でにけり。

弟子、同朋、名残を惜しみて悲しび、聞及ぶ人遠近市のごと
くに集りて、仙に登る人見んとてつどひたりけるに、此の僧
片山のそばにさし出でたる巖の上に登りぬ。一度に空へ登

そば
そは

登仙

坊
僧侶
語

やうあらん

とかくして

りなんと思へども、近く先づ遊びて、事の様人々に見せ奉ら
ん。」とて、彼の巖の上より、下に生ひたりける松の枝にゐてあ
そばん。」といひて、谷より生ひのぼりたる松の上四五丈ばか
り有りけるを、さかさまに飛ぶ。人々目をすまし、哀をうかべ
たるに、いかゞしつらん、心や臆したりけん、かねて思ひしよ
りも身重く、力うきくとして弱りにければ、飛びはづして
谷へ落入りぬ。人々あさましく見れども、これ程の事なれば
やうあらん。定めて、飛びあがらんずらん。」と見る程に、谷の底
の巖にあたりて、水瓶もわれ、我が身も散々に打損じて、只死
にに死ぬれば、弟子、眷屬騒ぎ寄りて、「いかに。」といへば、いらへ
もせず、僅かに息の通ふばかりなりけれど、とかくして坊へ

かき入れつ。ここにあつまれる人わらひのよしりて歸りけり。
 さて此の僧あるにも有らぬやうにて痛み臥せり。とかくいふばかりなくて、弟子も耻づかしながらあつかふ間、松の葉ばかりにては命生くべくも見えねば、年比いみじく食ひ残しつる五穀をもて、様々勞はり養へば、命ばかりは生くれども、足、手、腰も打折りて、起居もえせず。今は松の葉食ふには及ばず。本の如く五穀食ひ食ひて、弟子どもにゆゑしく譲りたりし坊も室も取返して、かゞまり居たり。仙道に至る人、たやすからぬ事なり。(十訓抄)

五穀
 米
 麦
 粟
 豆
 菽

か
 い
 ま
 り
 居
 たり

二七 馬琴の立志

饗庭 篁村

(一)後桃園天皇の御代。將軍家治時代。
 (二)小説の大家。嘉永元年(二五〇八)歿。年八十二。

(一)安永二年馬琴(二)七歳の春のころ、天神杵を縁側に持出して、兄が習ひたる手習手本を譲られて、それを習ひてありけるに、折ふし來客あり、まだ風寒ければ、障子たてこめたる一間に父と語らふ。其の事は俳諧の話なり。父運兵衛はかねて發句を好み、兄左馬太郎にも教へて詠まする事あり、俳諧の友二三人ありければ、それらの人ならんと聞くともなしに耳傾くれば、筆は草紙の上に止りて動かず。

をりふし左馬太郎は家に在らず。僕は姉娘を負うて物買に出でたり。末の娘の菊は乳にすがりて、母の膝を離れねば、母は庭より廻りて左五郎を小手招きし、お客様に茶を參ら

(三)馬琴の幼名。

片歌
(四)國學者。陸奥
の人。江戸淺
草に住す。安
永三年(二四
三四)歿。

詣深し

席にて近附となりたる人なり。彼の人は學識あり、今の世の俳諧宗匠は取るに足らずと見下して、俳諧といふものを古ぶりに引直し、片歌といふものにして世に弘めた。建部綾足といふ人なり。さるかしこきあたりより、「片歌道守」といふ號をさへ賜はり、弟子は千人の上にも達すべし。そののみならず、繪もよくかきて、寒葉齋といふ名高く、畫工としても當世並ぶ人少し。なほ其の上に和學にも詣深く、物語文の作さへあり。此の春、本朝水滸傳五册板行したり。我にも求めて讀めかすと、今噂せられたり。此の秋には續きて又五册板行なるべき下書も出來て、彫にかゝりたりといへば、なほ續きても世に出づべし。作物十册も續きて板行ならんとは稀有の

事なり。稀有の才人なり。汝もよく學びて、彼の人の藝能の一つだにも身に得るやうになれかし。としみぐくと告げければ、馬琴稚心にいと羨しく思ひけり。

風采

されば此の折のこと、老に至るまで忘れず。綾足を見しは

八宗兼學

泰斗

此の時なれども、其の風采をよく覚え居たりと、後に自ら記せり。馬琴が小説家となりしこと、或は此の時の感によりてにはあらずや。學問に涉らざる所なく、八宗兼學と擴げしも、此の時の感によりしにはあらぬか。馬琴をして小説家の泰斗とならしめし其の原因はさまざまならんが、思ふに是は其のうちの強き一因なりしならん。

二八 平等院

昔藤原道長の建立した法成寺は、善盡し、美盡し、磨き立てた御堂の板敷は、鏡のやうに人の姿が映つたので、一人の尼法師は、

曇なく琢ける玉の臺には
塵も居がたきものにぞありける

と詠んだ。場所は平安城の東方、四町の構の中に、七堂伽藍を建列ねた美々しさ。池は賀茂川の水を引いて、龍頭鷄首の船が浮いて居る。宛ら極樂浄土もかうであらうと思はれる。有様であつたが、今は跡形も無い。此の時代の繁華を語り、美術

眞言宗
金堂講堂
塔經藏
鐘樓中門
大門

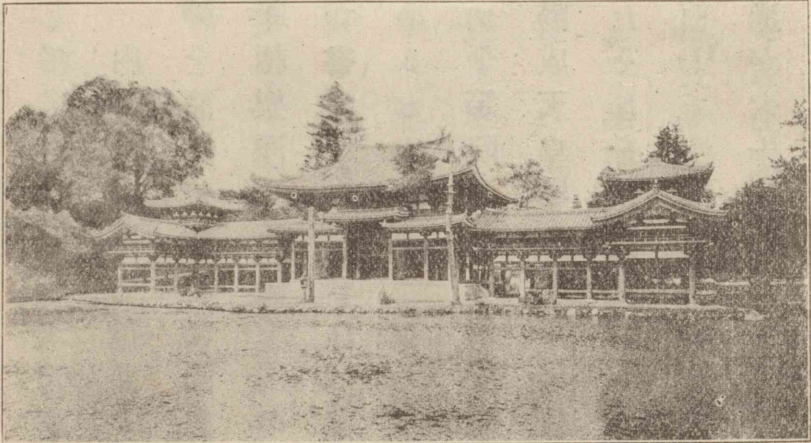
(一)京都の東北隅、京極土御門殿の中にあつた。道長寛仁二年(850)に建立し、無量壽院と稱せり。

玉の臺
平家高家

龍頭鷄首
極樂浄土

堂塔伽藍

鳳凰堂



平等院

の精神を示すものとしても、唯宇治の平等院があるばかりである。しかし、平等院も昔の壯觀は半ば無くなつた。昔は南にも大門、西にも大門、築地が四面を取圍んで、其の中には多くの堂塔伽藍が有つたが、一つ滅び、二つ廢れて、僅かに残つたのが阿彌陀堂、即ち現に鳳凰堂といふのがこれである。棟は高く空に聳えて、右左の翼廊と共に、鳳凰が飛翔して居る姿をな

して居る。

内陣の阿彌陀如來は、當時第一の佛師定朝^(二)が、一刀三禮精神を籠めて刻んだ佛、丈が一丈六尺、裝飾は畫家藤原爲成^(三)の筆、極樂淨土の圖で、扉の繪の色紙形には觀無量壽經の文句が書いてある。これは當時の書家堀川左大臣源俊房^(四)の書であるといふ。

平等院はもと河原左大臣源融^(五)の別莊であつた。此處へは陽成天皇、宇多天皇、朱雀天皇の行幸あらせられた事もあつた。それを道長が買取つて、子の頼通に譲り、頼通が更に造り直して、寺としたのである。これが後冷泉天皇の永承六年、頼通が六十歳の時で、大正六年を距ること實に八百六十七年

内陣
一刀三禮
(二)京都七條に住せり。法成寺の佛像も此の人の作。有名なる運慶は此の後胤。
(三)繪所長者となり、速書にて有名。後一條、後朱雀天皇頃の人。
(四)大政大臣源房の子。政治に達し文才あり。書をよきす。保安二年(一七八二)歿。年八十七。
(五)嵯峨天皇の皇子。寛平七年(一五五五)歿。年七十四。

錦繡

である。伽藍が出来上つてから十七年日、治暦三年十月十五日、後冷泉天皇がこゝに行幸になつた。

宇治橋の詰から御船に召されて、樂人が奏する樂の聲を愛でつゝ、漕上つて御出でになつた。頼通は心を盡して御待遇を申し上げた。川の上には錦繡を飾り立てた棧敷をしつらへ、池の上の唐船には樂を奏し、御前の物には金銀珠玉を飾つて、只管御慰め申し上げた。十六日は雨で御還幸も延び、十七日には又詩歌の會を御開きになつた。其の時天皇は、

忽ち看る鳥瑟三
明の朝暫く駐る鸞輿
一日の蹤

と、時も時めでたく御作り遊ばされたのであつた。

二九 借用品を傷ひし詫状

樋口 一葉

そゝろ寒し
青貝すり

十いと申しにくきこと、自身あがりて御詫び致すべきを、何かそゞろ寒きやうにて、人して御道具御返し致させ候。誠に中譯もなきは、此の御重硯二組のうち、青貝ずりのかた一つ、其の數不足に持たせあぐる事に候。御大切の御品拜借願ひおきながら、如何にも心なき不調法の事とも思召の程も、御耻づかしう候へども、昨日の會の終れる後、褥よ何よと取片附け、扱御硯箱つみ重ねんとしつるに、如何にかしけん、一つの縁の離れ居候へば、これは誰が業ぞなど給仕の女子ども

當惑

汗あゆ

に問ひたゞし候へど、夢さら存せぬ由を申すに、さらば客人たちかと、當惑此の事に候。御氣に入らざらんをば心苦しう思ひながら、今朝其のつくろひ致す者に、成る限りもとの様にと申し含め、持たせやり候へば、今三日ばかりのほど、拜借御許し願度、それをば持參の上、御詫には罷り出づべく、思はぬあやまちに唯汗あゆるばかりにて、細かには御詫も言ひあへぬを、思しゆるさせ給はらば辱く候。かしこ。

自修文

三〇 春の七草と秋の七草

正月七日に七種の粥を祝ふこと今も尙行はる。元は支那の風俗より出で、此の日に若菜を食へば、邪氣を除き病

(一) 芹なづな御
の座はこべら佛
すすいしるこれ
ぞ七くさ。

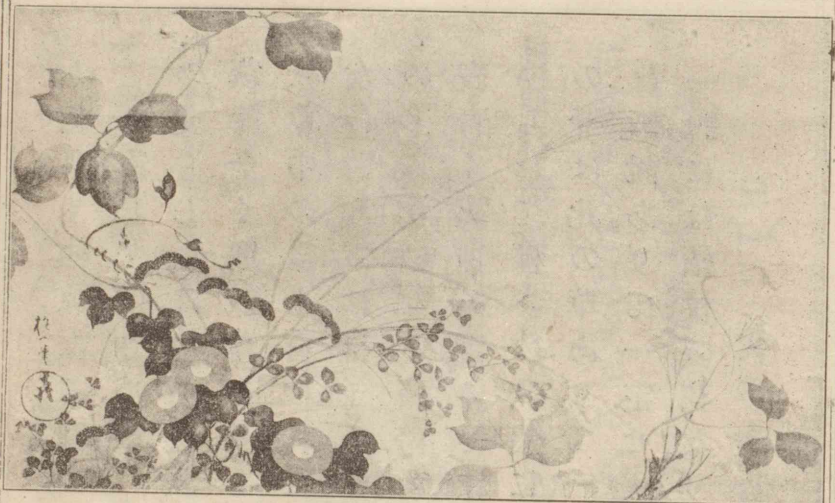
對生
むかひ合つて
生えること。

蓮華座
佛像の座。

難を受けずといふ信仰より來れり。古より用ひ來りし菜
の七種を春の七草といふ。芹薺御形はこべら佛の座す
なすゞしろこれなり。芹は日常の食用品なれば知らぬ人
なかるべし。薺は葉は蒲公英の如く、春の初小さき白花を
着け、後細かなる莢の實を結ぶ。其の實三味線の撥に似た
れば、俗にべんべん草といふ。御形は俗にいふもち草なり。
菊科に屬する草にて、春夏の交、黄花を着く。古名をはこ
草といふ。はこべらは又はこべともいひ、石竹科に屬する
小草にて、庭の隅、道端などに自生す。莖は方形にして蔓を
なし、葉は對生にして先尖り、白色十瓣の花、春の初に簇り
開く。佛の座は俗にたびらこといひ、地に叢生する狀、佛の
蓮華座に似たる故此の名あり。葉は圓くして五六分許、長
き蒂あり。春の末長き臺を出して五瓣の花を着く。すゞな

觀賞用

眺めてたのし
む爲。
(二) 奈良時代の
歌。萬葉集に
見ゆる。秋の
野云々。と秋
の花云々と秋
は二首の歌で
ある。
および
指のこと。



秋の七草 (井抱一筆)

はたうなすゞしろは大根なり。
春の七草の食用に供せらる
るに反して、秋の七草は全く觀
賞用なり。古き歌に

秋の野に咲きたる花を

および折り

かき數ふれば

七草の花

萩の花尾花くず花

なでしこの花

女郎花また藤袴

朝がほの花

とあるを、書物に見えたる始と

(三)をみなへし
うしと見つゝ
ぞ行過ぐる
男山にたて
りと思へば
(古今集)布留
今道
(四)思ふこと今
は無きかな撫
子の花さく
ばかりなりぬ
と思へば
拾遺集花山
天皇
(五)秋風の吹き
うららかに
の葉のうら
めしきかな
古今集平貞
文
秀句
巧に引つけ
た言葉

し、何れも爽涼なる秋の氣節に咲出でて、野の趣を添ふ。
 白露をこぼさぬ萩の枝ぶりもたをやかなるに、其の花
 の愛らしさは、白萩、紅萩いかでか其の區別あらん。漢字の
 萩は全く別の草なるを、我が國にてはぎに宛用ひたるは、
 秋草中の最も喜ばれたるものなればなるべし。女郎花の
 女に譬へられ、撫子の子にたぐへられたる、皆可憐なる趣
 の多ければなり。藤袴も姿やさしく、花も愛らし。葛の葉の
 表青く裏白く翻るさまのおもしろさは、恨みに秀句と用
 ひられて、種々の歌集に遺れり。尾花はすゝきの花にて、秋
 の野は此の草ありて一入のあはれさも添ふめり。朝顔に
 は數説ありて一定せず、今いふ朝顔なりとの説もあれど、
 一説には桔梗の花なりともいへり。

あかず思ひて

夏日の原と
 わたしのぼ
 よさかのぼ
 る朝日の子
 御影かしの
 き六月の空
 眞淵
 言ひたしな
 む

三一 妻の卓見

文學の大家賀茂眞淵は、壯年の頃濱松の旅宿梅屋といふ
 に養子となれり。されど客人に世辭などいふことを知らず、
 日毎に讀書にのみ心を傾けたり。されば養父なる人は、あか

夏日
 渡り原より来た朝日子
 御影かしの六月空
 眞淵

眞淵筆蹟
 (關正直氏藏)

ず思ひて言ひたしなむるを、妻は中に立ちて心苦しき言ふ
 ばかりなく、常に父と夫とをよき程に宥め居たり。さてつく
 づく夫の來しかた行末を慮りて、或夜夫に向ひていふやう、
 「つらく御身を見參らするに、一生を旅はたごの主人にて

（一）京都稻荷山の
神官を始めて國學を唱
ふ。元文元年（一七九九）
歿。年六十九。

眞淵

本縁宣長

終へ給はん人としも覺えず。二人の間に男の子一人あれば、世繼には事かゝらず。いでや終生の目的を定め給ひて、名を末代に残し給へ。女のさし出でたる事とな咎め給ひそ。」といふ。眞淵はいたく其の厚意を喜び、それより京に上りて荷田春滿の門に入り、遂に國學の名を成しゝなり。妻は貞節を守りて濱松に留りしが、眞淵に先だちて歿しけりとぞ。

亡き妻をいたみてよめる

賀茂眞淵

人はも

妹が門出入るごとにはや行きて
はや歸り來といひし人はも

思ひなしに
や

檐の玉水

端居

三二 秋夜

幸田露伴

秋の夜をうら悲しきものには、古より言ひならはしたり。實に春の夜の、月朧に風和ぎて、鐘の音なんども思ひなしにや、長閑に緩く渡るやう聞ゆる頃の様子には似るべくもあらず。また月無く空暗くて、小雨しめやかに降る夜も、春は檐の玉水の音さへ憎からで、燈火の光、取散したる机のまはり、茶碗、小土瓶、灰皿なんどもやさしく浮きて、身を寄する柱の吾が背にあたり加減にすら、言難き懐しさあり。

秋は甚だしくこれに異なり。晝の暑さの、夕風にやゝ去りて、露降る星の夜のいさぎよきに、小庭の闇を賞しつゝ、縁先の端居を楽しむ夏の風情もまた同じからず。まして窓打つ

時雨の音、或は雪の聲などに、外面の景色を思ひやりながら、座蒲團の温みに泥みて、埋火の假の情も振棄て難う、雄心も無く、はかなき草子などに讀入る冬の夜の趣は、似通ふ所有るが如くにして、實は大いに異なり。秋は晝よりも夜こそをかしけれ。されど其の夜の趣、春の夜のやはらかみ有りといふにも無く、夏の夜のいさぎよさ有りといふにも無く、又冬の夜のさび有るにもあらず。唯秋の夜は自らこれ秋の夜にして、必ずしも心悲しとのみにはあらざれど、強ひて言はんには、なほしか言はんより外に、辭も無かるべきにや。

夕汐に風収りて、青く澄みたる大空に、白き雲の絹綿を薄く引きたる如くなるが立ちたる儘、入日の光、少時の花やか

さび

菽

さを見せて、忽ち手元暗くなれる靜なる秋の暮の夜に入りては、大抵星高く空深くして、芋の葉の露、菽の葉の露、萬物に音無く、唯露の落つるなり。かゝる夜をこそ我が世とは思ふらめ。蟲の聲々競ひ立ちて鳴くは、聞く耳にも清々しく、爽なる限りなれど、憂ある人の寐られぬなどいふも、ひたすらに氣のみ澄みて、物の靜なる、かく晴れて而も穩なる時の事なるべくや。假初の物音も響き渡りて、隣家の厨のこゝろ、吾が屋の鼠のこそく、さては熟みきつておのづと落ちたる柿のけたましきなど、皆か様の夜の景物にて、燈も瞬かぬ午前二時頃、偶、古人の詩歌の字眼光を放ちて、蠹餘の紙上に起つて舞ふ姿の、今猶若く健なるを見なんどする事あれ

蠹餘

執し思ふ

ば、それより其の人いたく秋の夜を執し思ふに至るとかや。
 月の夜は秋こそ勝れたれ。春の月の光は美しき女の童の
 髪の如し。めでたきことは誠にめでたし。懐しきことも誠に
 懐し。されど猶聊か物足らぬ心地す。冬の月は水晶もて作れ
 るものを見るがごとし。清らさは餘りありて、味無きに近し。
 夏の夜の月の團々と大きなるが、海原の果より、松の樹の間
 より、又は市中の蔓の浪間より出でたる、いづれも目覺しく
 心ゆくものにて、夜の景色も快くをかしけれど、唯我が魂の
 世に浮るゝをこそ覺ゆれ。天地の靈氣の身に浸入るやうな
 るを覺ゆることなし。秋は夜面白く、夜は月面白し。中の秋の
 五日、六日の月のふと見る夕暮の空に出で居りて、雑木の梢

蔓の浪

白の

評論

かすけく

「春水満四
 澤夏雲多奇
 峰秋月揚明
 輝冬嶺秀孤
 松陶淵明」

窓櫺
 月天心を過
 ぐ光華六合に
 彌る

もろこしの垂葉などに、風かすけく囁く、まづ面白し。遠山
 黒く暮れて、素月輝を揚げ、庭樹のそれく、潤葉織葉の葉表
 の照、葉蔭の闇、おのがじし畫趣を爲し詩情をつくりて、合し
 て爽涼清澄の景を醸し出すさま、いづくにも有りふれたる
 事ながら好し。夜更け蟲吟じて、世の中靜なるとき、たま〜
 燈前に書をさし置きて、起つて廊を歩む因に、窓櫺の白きを
 見て、戸を推開きて出づれば、月天心を過ぎて光華六合に彌
 り、霜に澄める夜の氣は水まさに凍らんと欲するが如くな
 る、身心頓に此の世のものならずなりたるやうに覺えて、秋
 ならずでは、夜ならでは、月ならではと思はる。二十四五日まで
 ならずとも、二十日すぎの月を曉に觀たる亦好し。宵の酒聊

漸層

(一)「雪の日やあ
ひろひの子權
藤冠里」

すがれの蟲
の音

糟臭く腥し
我から我を
疎み心

か過ぎて、曉天夙く目覺めたるに、腔内猶熱して口渴を覺ゆ
るまゝ、これも人の子なれば、奴婢を煩はさんをかしから
ぬ心地して、獨り外に出で井の本に立寄る折柄、朝霧淺々と
罩めて、星弱々と消殘れる天のかなたに、秋とはいへど、力無
き月を見たる、なか／＼おもしろし。聊かの竹むら、草むらの
根方などは、猶や／＼闇きに、すがれの蟲の音かしがましか
らず。淺葱に明行く空吹く風の冷に、頷に落つる、譬へん方な
く胸涼しく覺えて、酒に黄金の漣を興じ、膾に銀絲の美しさ
を賞せし昨夜の筵も、たゞ糟臭く腥くして、浮世の垢を嘗め
しには過ぎざりけるをと、少しは我から我を疎み心になる
も、秋の與ふる智慧といふものなるべきにや。

孤篷

牂牁

心頭の狀
融合

秋よし、夜よし、月よし。舟にして之を味ふ、最もよきやうな
り。大江露に更けて、天地月に白む時、孤篷に身を埋めて、隱洲
の洲垂に泊れば、流水微しく牂牁に激して、船底に玉琴の鳴
るを聞くが如く、兩岸夢より淡くして、渚の葭の黒みも、楊の
丸みも、唯一様に一刷毛の墨と淡く暈み、人語と世塵とすべ
て皆到らず、詩情と茶趣とたゞ双び在るをかしさ、何とも言
ふべくもあらず。寂として、心頭の狀と眼前の景と共に融合
せんとする時、余吾鷺のふはりと下りて、羽づくろひして、艦
に寐たるなど、江心夜泊の實を味ひたる人にして、後其の
趣を知るべきのみ。

東亞之光

話柄

言の葉草

三三 交際と文學の趣味 三輪田眞佐子

凡そ女子の交際するに當りて、最も缺乏を感じるものは話柄ならんかし。思ふに、男子は外事をつかさどるものなれば、自ら眼界ひろく、聞知することも亦多からん。されども女子は家門を出づる機會も少く、たとひ相當なる社會の業務に従事するものなりとも、其の見聞の男子に及ばざるは事實なるを以て、通例の女子は談話數刻に至らんか、忽ち思想盡きて、いひ出づべき言の葉草は無かるべし。
これを以て女子の相會合するに當りては、其の年齢若きものは戯れて笑ふに止るか、さなくば他人の身上を批評し

毀譽
褒貶

混々

て話柄となし、辛うじて一座の興を維持する觀あり。されど戯れて笑ふは少女の時代には許すべくとも、既に人の夫人とも呼ばるゝ時代に於ては、譽むべきわざならじ。或して交際の話柄として、人を毀譽し、褒貶するが如きは、女徳を損ふこと最も甚だしきことなれば、固く禁すべき事にこそ。然らばいかにしてかゝる缺點を補ふを得べき。蓋し話柄に窮するは思想の豊ならざるに由るべければ、須く思想を養ふべし。さらば自ら高尚になるのみならず、双方の益となるべき話柄混々として盡くること無かるべし。故に今後交際しげき世に立ちて、口もて禍を買はざらん事を願ふ子女は、思想を富ますばかり必要な事はあらじ。

樞要

韻致

金玉の聲

交際上樞要なる思想を養はんには、まづ文學を修むるに若くはなし。即ち文學の趣味を積み、衆人に向ふ時の話柄とすべし。抑、文學は宇内の美妙を寫し、人情の韻致を載するものなれば、苟も文學思想あらんか、其のいふところ高雅なるをもて、他人の感情を害すること無かるべく、又其の語る事によりて、血あり涙ある人たるを知るべければ、誰か之に接してゆかしき思なからん。わきて春花秋月の折につけても、其の言錦繡の色あり、其の語金玉の聲あるべし。などが、人の福を壽ぐに辭を過らん。人の憂を解くに詞を失はん。又文學の趣味ある人は品性高きを以て、門地低く財寶乏しくとも、高位高官の人と平等の交際を爲すことを得べし。

京都市東三條の北三町にありし應仁以後廢立。白河天皇の建

また其の容貌愚なるが如きものありとも、文學の徳内に積るものありて、自ら外に現れんには、忽ち人をして敬愛の情を起さしむるに足らん。

昔一人の僧(一)法勝寺の櫻のもとに佇みけるを、若き女房四人うちむれて花を賞しけるが、これを見て、かれも人なみに花見んとてあるにや。と嘲りて、僧に向ひて、此の花一枝折りて給べ。といひたりければ、此の僧うち案じて、

山がつはをりこそしらね櫻花

さけば春かとおもふばかりぞ
といひかけけり。之を聞きて、前に笑ひつる女房ども、答ふる
こと能はずして、驚きて立去りけりとかや。かく僧を笑ひし

蓄積

者をして、反りて後の世の笑を招かしむるに至らしめしは、文學の蓄積ありしによりてなりけり。凡そ萬山皆花の候とならば、定めて三々五々打群れて花を眺むる少女もあらん、老婆もあらん。彼等には果して如何なる文學思想あるか。

一丁字

方便
別事に屬す

茲に注意すべきは、いかに文學ある女子なりとも、われこそ風流なれ。といはんばかりの動作あるものは、眞の文學趣味ある女子といふべからず。唯々一見して表に一丁字も知らざるが如き舉止あり、内に文學の徳を備へたるゆかしき女子こそ望ましけれ。故に交際に文學を必要とするは、思想を養はん爲に止りて、文學を方便として交際するが如きは別事に屬すべし。和歌を知らざる友に向ひて、三十一文字の

話を試み、雅言を解せざる人に對して、俗語を用ひざるが如き事あらば、反りて人を耻ぢしむるに至るべし。最も戒むべき事にこそ。されば、おのれは、文學にて心を養へ。といふのみ。文學を口に談ぜよ。といはざるなり。

——女子日本讀本——

女子國文卷五終

通用字及び正字對照表

(茲に其の主なるもののみを擧ぐ。本
書には主として通用字を用ひたり。)

乃	函	凡	凡	減	涼	準	准	况	決	冒	口	兔	免	佞	仍	兩	通用正	
刃	函	凡	減	涼	準	况	決	冒	圓	兔	免	佞	仍	兩	兩	通用正		
回	噴	器	唇	叙	収	双	厥	厥	厨	即	卑	勺	効	劔	劔	剪	通用正	
回	噴	器	唇	叙	収	雙	厥	厥	厨	即	卑	勺	効	劔	劔	剪	通用正	
懺	懃	恒	徃	廻	廩	并	帽	尅	寶	寇	冤	塚	塚	場	場	場	通用正	
懺	懃	恆	往	迴	廩	并	帽	剋	寶	寇	冤	冢	冢	場	場	場	通用正	
桿	朽	史	晋	昂	既	整	携	捏	插	拔	拿	拘	戲	戲	戲	戲	通用正	
杆	朽	史	晋	昂	既	整	攜	捏	插	拔	拏	拘	戲	戲	戲	戲	通用正	
猷	猫	猪	猿	熔	焰	潛	潛	潤	涅	冰	毒	殺	殲	欸	楮	楮	通用正	
猷	貓	豬	猿	鎔	焰	潛	闊	涅	冰	毒	殺	殲	欸	楸	楸	楸	通用正	
穎	稟	碍	砲	盜	蓋	盃	鼓	痴	畧	留	畫	瑣	玄	獵	獵	獵	通用正	
穎	稟	礙	礮	盜	蓋	杯	鼓	癡	略	畱	畫	瑣	玄	獵	獵	獵	通用正	
劬	俟	京	亡	並	萬			織	紀	毅	粘	籤	纂	竝	竊	秘	頤	通用正
倣	埃	京	亾	並	萬			織	紀	毅	黏	籤	纂	竊	竊	祕	頤	通用正
廝	廁	勅	冲	富	冊	同		膝	腸	脈	胆	聒	耻	羹	群	罰	纏	通用正
廝	廁	敕	冲	富	冊	字		膝	腸	脈	膽	聒	恥	羹	羣	罰	纏	通用正
妍	妊	野	坂	嚙	叶	表		衛	蛩	萌	莽	艷	館	鋪	阜	致	臥	通用正
妍	妊	埜	阪	齧	協	もいづれにて		衛	蛩	萌	莽	艷	館	鋪	阜	致	臥	通用正
峯	峩	岳	婚	娉	姊			豹	象	讎	讖	記	解	覽	霸	褒	裡	通用正
峰	峨	嶽	婚	聘	姊			豹	象	讐	讖	記	解	覽	霸	褒	裏	通用正
微	強	弊	弊	庵	嶋			鎖	鐵	針	釜	隣	輒	軟	贗	贊	賓	通用正
微	強	弊	弊	菴	島			鎖	鐵	鍼	釜	鄰	輒	軟	贗	贊	賓	通用正
村	普	考	慙	慙	忘			鶴	鬱	鬪	麵	馱	隸	隙	隔	陌	間	通用正
邨	普	攷	慚	慚	忘			鶴	鬱	鬪	麪	馱	隸	隙	隔	陌	間	通用正

附錄

柿	梃	案	基	棕	楫	稿	概	朴
枇	桉	椀	棋	椶	楸	槁	槩	樸
毘	汙	汗	温	烟	無	猪	狸	睹
毗	汚	汗	温	烟	无	貉	狸	覩
砧	稿	稊	競	筍	筍	紮	紮	紮
砧	稊	稊	競	筍	筍	紮	紮	紮
網	總	縲	縲	縲	縲	縲	縲	縲
網	總	縲	縲	縲	縲	縲	縲	縲
荒	蔭	蔭	蔭	蔭	蔭	蔭	蔭	蔭
荒	蔭	蔭	蔭	蔭	蔭	蔭	蔭	蔭
躑	躑	躑	躑	躑	躑	躑	躑	躑
躑	躑	躑	躑	躑	躑	躑	躑	躑

體タイ 體ホン 巨クワ 互コバ

ワタル。「連互」
 柁ニ同シ。アラシ、鹿、粗。
 カラダ。

本來ハ異字ナレドモ同字若シクハ略字
 トシテ往々混用セラル、モノ。其ノ中
 * 標ヲ附シタル文字ニ限り、慣用ニ從
 ヒテ強ヒテ區別スルニ及バズ。

絲シ 糸ベキ 欠ケ 鎗サウ 改カイ 擔タン 託タク 託タク 姬キ 姬キ 壺コ 壺コ

ツホ。
 ミチ、宮中ノミチ。
 ツ、シム。
 ヒメ。
 拓ニ同シ。オス、ヒラク。
 ヨル、タノム、ユグヌ、カコツク。
 ハラフ。又アグ。
 ニナフ、カツク。
 鬼ヲ追フトイフ星ノ神。
 アラタム。
 ヤリ。
 鐙ニ同シ。鐘ノ聲ノ形容。
 アクビ。「欠伸」
 カク。「缺席」
 ホソイト、細絲。
 イト。

商シヤウ 商シヤウ 后コウ 后コウ 臺タイ 台タイ 刺シ 刺シ 協ケツ 協ケツ 胃イ 胃イ 僭ケン 僭ケン 但タン 但タン

タマシ、タマ。「但馬」
 ツタナシ、拙劣。
 ミダリガハシ、猥。
 身分ヲ越エテオゴル。「僭越」
 カブト、兜。「甲冑」
 ヨツギ、嫡子。又子孫。「冑裔」
 カナフ、叶。
 オビヤカス、脅。
 サス。「刺殺。刺客。名刺」
 モトル、ソムク、乖戾。「亞刺比亞」
 星ノ名。又敬意ヲ表スル爲ニ語ノ上ニ添フ。「台覽。台臨」
 ウテナ、グイ。
 ノチ、アト、ウシロ、シリヘ、オクル。
 キミ。「皇后」
 アキナヒ。
 モト、本。

撰セン 選セン 迄キツ 迄キツ 豊ホウ 豊ホウ 証シヨウ 證シヨウ 詔シヨウ 詔シヨウ 託タク 託タク 蟲チュウ 虫チュウ 羨セン 羨セン

支那ノ地名。
 ウラヤム。
 魚介類ノ總稱。又ママシ。
 シム。
 ワビ、ワブ。「詭狀」
 訛ニ同シ。アザムク。
 ヘツラフ。
 ウタガフ、疑。
 アカシ、シルシ。「證明」
 イサム、諫。
 禮ノ古字。
 エタカ。
 マテ。
 エグ、行。
 エラブ。(ヨリトル)
 エラブ。(書物ヲ編纂ス)

* 卻シヨク

ヒマ、陰。
ミリツク。「退卻」

鍛カネ

キタノ。「鍛錬」
シコロ、鍛。

宛 字 (左の如き字は假名を
使用するをよしとす)

おほつかなし 覺束なし

かひ(詮の意
の場合) 甲斐

きつと 屹度

さすが 流石、遠

しまふ 仕舞ふ

だけ 丈

だめ 駄目

ちやうど 丁度

ちよつと 一寸、鳥渡

でたらめ 出鱈目

とうく

到頭

とかく

兎角、左右

とて、とても

迪

とにかく

兎に角

なか／＼

中々、却々

ふるまひ

振舞

はかなし

果敢なし

ほんたう

本當

むだ

無駄

むづかし

六ヶし

やたら

矢鱈

やはり

矢張

附 録 終

大正六年十月廿七日 印 刷
大正六年十月三十日 發 行
大正七年一月十六日 訂正再版印刷
大正七年一月十九日 訂正再版發行

(女子國文)

定 全	八 冊
價 各	金三拾四錢
大正八年度 臨時定價	金四拾八錢

著 者 芳 賀 矢 一

發 行 者 兼 印 刷 者 合 資 會 社 富 山 房
東京市神田區裏神保町九番地

代 表 者 合 資 會 社 富 山 房 社 長 坂 本 嘉 治 馬
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印 刷 所 株 式 會 社 秀 英 舍 第 一 工 場
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地



發 行 所

東京市神田區
裏神保町九番地

合 資 會 社 富 山 房
電話神田三〇一四、三七六〇、三六六三番
振替貯金東京五〇一一番



田中
田中
田中

